誰のせいでもない雨が

~ センター広報・編集後記 26 年史 ~ *

渡部 善隆 †

残すべき"資料"としてのセンター史

今年 1994 年 (平成 6 年) は、九州大学大型計算機センターにとって 1969 年 (昭和 44 年) 3 月に福岡市東薬院の仮設センターで計算機の稼働を開始してから 25 周年にあたる。計算機環境が激変し続けた四半世紀の歴史を、何とか折り合いをつけながら無事に切り抜けてきたということで、6 月 20 日には 25 周年記念式典が開催され、さらに近々『センター 25 年史』(仮題) が刊行予定である。

九州大学大型計算機センターの歴史については、この『センター 25 年史』および、1981 年 (昭和 56 年) に広報特別号として発行された『10 年のあゆみ』に、システムの変遷・年譜が、当時を知る人の随想とともに掲載されている。センターの歴史を語る文献としては、この二冊で十分であるし、今後も貴重な資料として重宝がられることは間違いない。しかしながら、この二冊の足りない部分をあえてあげれば、「後に残すべき資料」という性格を持ったが故に、自然「計算機システムについて何事かを語る」ことになり、当時のセンターにいる人がどんなことを考えていたのかという、実は野次馬的に一番面白い部分が欠けている。

センターの歴史を、一つの読みものに仕立てあげるためには、過去のセンター職員全員に何か書いてもらうなり、インタビューし、倉庫に埋もれている大半は無味乾燥な資料を丁寧に仕分ける作業の後、もちろん極めて優秀な編集スタッフで原稿をまとめる必要がある。しかし、そのようなことを実現するための大きな障害がある。それは、仮に素晴らしい"読みものとしての"本が出来上がったとしても、絶対に売れないという悲しい事実である。

残さなくてもいい"散文"としてのセンター史

そこで、できるだけ楽をして、計算機システム以外の切り口でセンター創立から現在に至る歴史を語れないかと考えて、『広報』の編集後記を引っ張り出すことにした。

例えば『10 年のあゆみ』の随筆のコーナーを読めば、当時の、俗ないい方をすれば"偉い人[1]"の思いは伝わってくる。なぜなら随筆の執筆者は皆さん"偉い"からである。それに対して、広報の編集後記を書いてきた担当者は、次章以降を読まれればわかるように、ほとんどが"偉くない人 [2]"である。

広報の編集は広報教育委員会で行なう。センター内には、広報教育委員会に対応したグループがある。最近はこの広報担当の職員が持ち回りで編集後記を執筆することになっている。そ

*1994 年 7 月 15 日受理

†九州大学大型計算機センター・研究開発部

[1] これは「責任を持つ、あるいは監督する立場にある人」という意味で、他意は一切ない。

[2] これは"偉い人"以外の人という意味。他意は一切ない。

の昔は、一人で長期間に渡って編集後記を書いていたこともあった。

私は広報担当になったことがないので、まだ一度も編集後記を書いたことがないが、これまで見ている限り、編集後記を書く順番になった担当者のとる行動はだいたい次のようである。

Step 1 : 〆切ぎりぎりまで書くことを忘れようと努める
Step 2 : いざ原稿を催促される段になってあわてる
Step 3 : 「自分は文章を書くのが苦手だ」とあらかじめ逃げを打つ
Step 4 : とか言いながら、面白い文を書こうと頑張る

昔も編集後記を書く人の立場は、上とあまり変わらなかっただろう。出来はさておき、その苦労はむくわれているようである。私の知っている人は広報が送られてくると、編集後記だけ読んでさっさと広報を部屋の端の本棚にしまってしまう。おそらく他の解説記事は二度と読まれることはない。以前利用者に、広報記事の中でどのコーナーを読むかのアンケートをとったことがある。結果は *Vol.26, No.4* に掲載されているが、この中に編集後記の欄がなかったことは大変残念であった。しかしながら、例えば「ライブラリ室だより」を読むまたは目を通す人が 81.5% もいる結果から、これは予測であるが、おそらくかなりの人が編集後記に目を通すものと考えられる。理由は、編集後記が常に広報の終りに位置しており、パラパラめくった時に目につきやすいことと、一般に「堅い」解説記事の中で、楽屋落ちのようなくだけた文が多いことからの推測である。

編集後記について

『九州大学大型計算機センター広報』は、 *Vol.1, No.1* が 1968 年 (昭和 43 年) に発行された。この号である *Vol.27, No.4* まで足かけ 27 年間、別冊を除いて合計 135 号が発行されている。実際は合併号が二度出されているので、冊数は 133 冊になる。その中で編集後記は一回の休みもなく掲載されている。

本号や過去の編集後記も大体そうであるが、執筆者の名前はイニシャルかペンネームもどきである。例をあげる。センター内部の当時を知る人でないと、誰が書いたのか分からない。

もうそろそろ人生下り坂に近付きつつある S.A.
アトピー fujii
K 子
F
暑くても夏太りしたオバタリアン

編集後記は多くても一ページであり、軽い読みものが主なので、名前を出して責任を明記する必要もなかろうと思われる。本稿では、明らかな誤字以外は広報掲載の原文のまま引用し、この記事を書いたのが誰で、何のつもりで書いたのかなどという追跡は (本当は是非やりたかったが) 原則としてしない。ただし、記名の場合はそのまま紹介する。

また、ときたま計算機センターとは直接関連のないかもしれない編集後記を紹介して、なおかつ話を更に脱線させる場合があるが、「広報の記事の紹介とそれに対するコメント」という範疇でかろうじてセーフだと開き直らせていただく。

なお、表題は中島みゆきさんの曲名から勝手に使わさせていただきました。詳しくはアルバム『予感』(1983 年発売) をお聴き下さい。特に落ち込み気味で元気のない人は必聴です。

1

1968 ~ 1969

広報創刊

記念すべき広報創刊号は、1968 年（昭和 43 年）4 月に発行された。発行は九州大学大型計算機設置準備委員会である。センターの建物は前年の 12 月に建築工事が着工され、広報発行のこの時点ではまだ未完成であった。

> 九州大学大型計算機センター広報の創刊号がようやくできあがりました。頁数も計画の 2 倍以上になり、ついでに発行も 1ヵ月ほども遅れてしまい、読者の皆様には申訳なく思っております。
>
> 正式に計算機が稼働するのは、来年の 1 月からということで、センター広報ができたからといって計算機はとにかく、センターの建物も未完成のため現在仮住いの状態です。新センターを利用者の方々に簡単な手続きで便利に使用できるよう関係者一同努力しております。未経験者の集まりで作ったこの広報には不備な点が多くあるものと思います。読者の皆様の御協力により充実したものにしていきたいと考えております。
>
> (署名なし)
>
> *Vol.1, No.1, 1968.*

天から降った人災

ところが、順調にいけば来年の 1 月から正式の稼働をするはずであったセンターは、文字通り「天災」に見舞われる。1968 年 6 月 2 日のことである。

炎上中のセンター

広報第 2 号をお届けします。新聞等の報道ですでにご承知のように、九州大学大型計算機センターの建物に米軍ジェット機が墜落するという不幸な事件が起りました。事故報告の中に詳しく述べてあるように、今後このような事が起こらないようにするため、またこの事態を収拾するため九州大学は最大限の努力を行なっています。

この事故によって、大学における研究に大型計算機が、いかに重要であるか、また各研究者が大型計算機に対し、いかに期待していたかを再認識し、センター関係者の責任の重大さを痛感しているしだいです。

(有田記)

Vol.1, No.2, 1968.

集まる野次馬

全くの幸運として、この事故ではパイロットがパラシュートでの脱出の際にかすり傷を負った以外、一人の死傷者も出なかったことで（まだ熱い機体の残骸を取ろうとして火傷した人を除く）現在では何とか笑い話として話せるようになった。しかし、この事故を契機に一気に盛り上がった九州大学の学園紛争では、多数の重軽傷者が数えられることになる。

センター建物、シンボルに祭りあげられる

この学園紛争の時代を笑いとともに語れるのは、それを全く知らない世代であり、その渦中にいた人から当時の話を笑い話として聞くことはまれである。

学園紛争を“傷”として持つか“宝”として持つかはそれぞれであっても、当時の九州大学の関係者は「俺はそんなものどうでもいい」と言う人すら、“無関心”という立場から結局全員紛争に参加する。逃げ場はなかった。

殴り合いというより一方的に殴られている

1968 年 ~ 1969 年は全世界的に“学生反乱”が勃発した。フランスでは「五月革命」といわれる学生運動が盛り上がり、チェコスロバキアでは「プラハの春」とよばれる改革運動、アメリカではベトナム反戦運動が最高潮であった。日本もこれに同期をとったかどうかはわからないが、全共闘運動の象徴ともいえる東大・安田講堂の攻防戦は 1969 年 1 月である。

理由ははっきりしないが、要するに世界的に“high”になっていたようである。ちなみにアポロ 11 号が月面に着陸したのは 1969 年 7 月 20 日である。アポロ計画は 1972 年に、アメリカ世論の冷却とあまりにお金がかかるという理由で打ち切られる。アメリカがウッドストック・フェスティバル (1969 年 8 月) をやるような“high”な時期だからこそ可能だった月着陸だったかもしれない。

これまた余談だが、私の周りの 1969 年生まれには面白い人が多い。

機体撤収に反対するデモ

さて、九州大学も建設中のセンターへの米軍機墜落をかなり大きな契機として“high”な状態に突入する。ジェット機が墜落した建設中のセンターは「けしからんモニュメント」としてシンボル化されてしまい。結局機体を引き下ろしたのが機体墜落の半年後、建築工事が再開されたのは更に一年後、建物が完工したのは 1970 年の 3 月末であった。当時のセンター職員にとっては、殴る蹴るの大迷惑である。

仮設建物での稼働開始

それでは、 1970 年の 3 月の建物完成までセンターはどのようにして苦境を切り抜けたのであろうか。編集後記の続きをめくっていく。この頃にはのんびりとしたエッセイを綴っている場合ではなくて、利用者への切実な呼びかけになっている。

> 広報 Vol.2, No.1 がやっと発刊のはこびとなりました。九州大学大型計算機センターは、すでに広報等でお知らせしたように、昨年 6 月の米軍ジェット機墜落事故による建物の破壊と、墜落機体の処理をめぐる紛争のため、当初予定していた今年 1 月の稼働開始はおろか、その設立さえあやぶまれていました。しかし利用者の方々の強い要望と、学内外の暖かいご支援により、 44 年度予算が認められ、また仮設建物も内定したので、センターでは 3 月稼働開始を目標に鋭意努力中であります。
>
> (有田記)
>
> *Vol.2, No.1, 1969.*

上の文章の「44 年度予算が認められ」るまでの流れを 1971 年 (昭和 46 年) 発行のセンターパンフレットから抜粋する。

昭和 43 年 6 月　機体墜落
7 月　“大学大型計算機センターの復旧建設に対する要望書”が学内有志により九州大学学長に提出される
8 月　機体引降し準備作業の際一部集団の暴力行為により、教官、職員、学生に負傷者を生じる
12 月　“大学大型計算機早期利用に関する要望”が学内有志により文部大臣に提出される
昭和 44 年 1 月　米軍機の機体が引降ろされる
“大学大型計算機早期利用に関するお願い”が鹿児島大学、宮崎大学、大分大学、熊本大学、長崎大学、九州工業大学広島大学より文部省に提出される
大型計算機の早期利用を要望するため九州大学学長が文部大臣と会見
レンタル料の他に運営費、定員の一部が認められる

仮設の建物は福岡市東薬院の九州電力研究所跡に、借用 1 年という期限つきで 1969 年 3 月 7 日から計算機が稼働を開始した。

> 米軍機墜落事故以来 1 年が過ぎてしまいました。センターは借り住いでどうにか動いておりますが、講習会を開くにしても会場がないために、渡り鳥的な講習会を開かねばなりません。東薬院の仮センターと九大構内の受付返却室とは、ライトバンで 1 日 4 往復の定期便を運行しております。交通事情の悪い場所であることも関係してターン・アラウンド・タイムが当初予定していたものを大幅に超過しています。
>
> (津田記)
> *Vol.2, No.2, 1969.*

計算のターンアラウンドが交通事情に左右されるというのもすごい話である。

1969 年の最後の編集後記には、大変だった一年を振り返り、またセンター職員の当時の気分がよく伝わってくる。

> 九大センターのこの 1 年をふりかえって、その目まぐるしさに驚いております。センターの設置さえもあやぶまれていた元旦に始まり、1 月 5 日に墜落したままであったジェット機の引き降し事件、追加予算によって九大センターの仮設置が認められ、3 月 6 日には旧九州電力研究所に計算機の搬入、以後試験期間を経て 6 月 2 日より負担金を徴収してのユーザーサービスを開始し、一応は落ちついたかに見えたセンターでした。しかしながら、建物の被害調査も進展せず、来年度予算として九大センターの予算が計上されなかった 8 月末の時点においては、九大は計算機センターをあきらめたといううわさも手伝って、来年度以降の身のふり方を真剣に考えていた教職員も少なくなかったと思います。学内外の関係各方面のご尽力によって、どうやら来年度も首がつながりそうな気配ですので、安心するとともに来たるべき年のために志気を高めております。
>
> (津田記)
> *Vol.2, No.4, 1969.*

2

1970 ~ 1972

建物の移転

年が明けた 1970 年は、編集後記の文章からも少し落ち着いた様子が伝わってくる。

> 「九大センターの利用者はおとなしい。」という話を時々耳にします。問合せ票や投書箱の利用も少ないようですし、一時は苦情窓口的な感じがしていたプログラム相談も最近では苦情らしきものが見うけられません。これはセンターが利用者にとって円滑に動いているためでしょうか。それとも利用者にあきらめられたためでしょうか。仮設センターだからと今まではつい目をつむってしまったと言われる方も多いことでしょう。利用者の声が将来のセンターを作り出すものと思います。迷惑したこと、うれしかったこと、新らしいアイディアなどをどしどしお寄せください。
>
> (署名なし)
>
> *Vol.3, No.1, 1970.*

1969 年 3 月以来仕事を続けていた仮設センターを引きはらい、ジェット機墜落事故現場から生まれかわった現在のセンターに移転したのは 1970 年の 4 月である。 4 月 27 日には利用者業務を再開する。

> 広報 Vol.3, No.3 をお届けします。すでに御承知のことと思われますが、待たれていたセンターも建物の一部 (九大中央計数施設 : 6 階) を残して完成し、去る 5 月 8 日には関係各方面の方々にお集まりいただき開所式を開催いたしました。不慮の事故にもかかわらず九大センターが完成しその業務を続けることが出来ますのも、関係方面のご尽力と数多くのセンター利用者の後押しのたまものとあらためて感謝いたしております。
>
> (津田記)
>
> *Vol.3, No.3, 1970.*

完成直後のセンター建物内部

以下、徐々にセンター業務は軌道に乗る。

センターの移転の関係で一カ月遅れて利用者講習会 (初級 FORTRAN, ALGOL) を開きました。情報化時代ということもあって受講希望者が多く FORTRAN に関しては 5 月と 6 月と 2 度も行なうことになってしまいました。演習問題を実際に計算機に通し、エラーを修正して再度計算機に通すなどと昨年の仮センターでは不可能であったことも本センターに移転したことにより可能になり受講者の皆さんにも喜んでいただけました。なお講習会当日にはオープン・パンチ室が混雑して一般の利用者にご迷惑をおかけしましたことをおわびいたします。

(津田記)
Vol.3, No.3, 1970.

TSS の実験開始

TSS(Time Sharing System) とは、一台の計算機を何人もがそれぞれの目的に応じて処理を行なう方式のことで、現在ではむしろ“バッチ処理”の反対として「対話的に処理を行なう」意味のようになっている。

センターの TSS 処理は 1970 年より実験が開始された。

8 月 7 日に運営委員会が開かれましたがその際、端末 18 局の設置が認められましたので、いよいよ 10 月よりセンター外の端末によって T.S.S. が実験されることになります。9 月 25 日には今回設置される大学、研究室の方に対して端末機器取り扱い方法の説明会が開かれました。時間が限られていたためにあまり実質的なジョブは実行できませんでしたが、今後週 2 回程度 (現在は火曜の午前と土曜の午後) を T.S.S. 実験のために計算機を開放しますので、大いにご利用ください。とは言うものの T.S.S. は実験段階です。種々トラブルが発生する可能性もありますが、将来の本格的利用を目指しての実験ですから、利用者の方々のご協力をお願いします。

(津田記)
Vol.3, No.5, 1970.

先日、名古屋大学大型計算機センターの「ニュース」の創刊号が届きました。来年度開設を目ざして準備の進んでいる様子がうかがわれました。関係の皆様方の御健闘をお祈りいたします。 (中略)

最近、計算、穿孔依頼もふえ、 2 階のオープンパンチ室、ディバッグ室、プログラム相談室あたりがなんとなくゴタゴタしております。オープンパンチ室は夜間 8 時まで利用できますので、あらかじめ申込んでおいて、御利用下さい。

(小野記)
Vol.3, No.6, 1970.

「なんとなくゴタゴタして」いるというのは、なかなかうまい表現である。

TSS に関しての続報は翌年に掲載された。

「端局の利用について」と題して、九州大学教養部 竹田教授に、 TSS の端末から計算させた経験から TSS のつかい方について書いていただきました。

端末から入力して、計算結果の出る遅さや、少しのミスにも思うようにゆかないことに、イライラしたり、いろいろなことをしてみたが「どうなるだろう」と少々オロオロしながら、計算させていらっしゃる様子が目に浮かぶようです。

(小野記)
Vol.4, No.4, 1971.

オープンパンチ室

当時の TSS は、「イライラ」「オロオロ」どころか、ボロボロの状態であった。実情は『10年のあゆみ』のエッセイに述べられている。

> (TSS を使う) 常連の間では“忍耐と寛容”のスローガンが常に唱えられていた。応答の遅いこと。どうかすると数分ないし数十分またされる。REMOTE BATCH で JOB がたまってきて一台が連続して数件の計算結果を印刷し始めると、もう他の端末機は長時間にわたり相手にされない。そのうちに 3, 4 時間の利用時間は終了し、それまでの努力は水泡に帰する。ダウンはよくする。ファイルはこわれる。“忍耐と寛容”のお題目を唱えずに自分の心を慰めたり、笑顔を維持したりすることは困難であった。
>
> 国宗 真「10 年間の思い出」
> 『10 年のあゆみ』より

読みにくいマニュアル

また、この頃には、次のような悩みが発生していた。

> 現在たくさんのマニュアルがメーカーから発行されておりますが、これだけではよくわからない、という声が聞かれます。それで、不備な点や不明な点を追加・補足しながらマニュアルの紹介なり解説なりを試みようということで、今度の広報からシリーズで載せることにしましたので、ご参照ください。なお、疑問点などがありましたら著者までご連絡ください。
>
> (井上記)
> *Vol.4, No.5, 1971.*

読みにくいマニュアルを読み解き、分かりやすい解説を書く必要がどこにあるのか、しかも全く専門外であり、興味もないのに... ぶつぶつ、という声はこれからずっと聞こえることになる。そして、専門的なライブラリの急激な増加の前に、徐々に“お手上げ”の角度はだんだんあがっている。

現在の時点から振り返ってはっきりとしたことは、“マニュアルが読みにくいソフトは基本的に下らないソフトであり、従って必ず使われなくなる”という淘汰の原理がアプリケーション・ソフトウェアに確実に働いたことである。

TSS の運用開始

さて、一部の利用者の"忍耐と寛容"に支えられて、やっと TSS は運用に移行された。

> 長い間続けてきました TSS 実験もシステムが安定してきましたので、5 月から一部運用を始めました。デマンド関係がまだ実験段階ですがこれも近い将来運用できる予定です。
>
> 端局利用の方々には実験にご協力いただきましてありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。
>
> (井上記)
>
> *Vol.5, No.3, 1972.*

「実験」とか「試験運用」というと聞こえはいいが、実のとこは「バグ出し」である。私がセンターに来て驚いたのはソフトのバグの多さである。もちろん利用者の計算結果にまで影響を与えるバグはほとんどないが、それまで漠然と思っていた「売りもののソフトにはバグがない」という神話はあっという間に崩れてしまった。

もう一つ驚いたのはバグを見つけた時の開発メーカーの対応の速さである。原因の説明、対処などの報告を聞くにつけ、「あれだけ優秀な開発スタッフが作って見落したバグだからしょうがないか」といって、個人的には許してしまいたくなるが、仮に重大な障害だった場合、「利用者の立場からはまことにけしからん話である」という大義名分を捨てる訳にはいかない。

利用の手引の発行

現在発行されている『利用の手引・ライブラリ編』のまえがきを読むと、1969 年 3 月に発行した利用の手引が、その後における全国共同利用センターの刊行物の原型になったと威張って書いてある。

真偽のほどは分からないが、センターを利用する手引は 70 年代、精力的に改訂が行なわれていた。

> 予定より大巾に遅れましたが、次の利用の手引がそれぞれ発行されました。
>
> 1. 手続き編, 2. 基本編, 3. 制御文編, 4. TSS 編
>
> これらのほか、ファイル編、ライブラリ編、XY プロッタ・紙テープ編については、現在担当者の方で努力していますので、間もなく発行できると思います。利用の手引きに関してお気づきの点がございましたらご一報ください。
>
> (井上記)
>
> *Vol.5, No.6, 1972.*

初期の利用の手引の中で、現在も基本編、TSS 編は健在である。また制御文編はバッチジョブ編と名前を変えた。その他ライブラリ編は最近 (1994 年) やっと復刊した。

編集後記に紹介のあったライブラリ編は、翌 73 年に発行される。そのライブラリ編（改訂第 1 版）は現在もセンターの図書室に保存されているが、ページが厚いために 3 年後の改訂では手書きの原稿を後ろに追加して発行し、とうとうその後 1994 年まで改訂がされることがない「幻の手引」となる。

17 年前の手書きの原稿の山を見て、当時を何も知らない編集者がどう思ったかは、1994 年に改訂された『ライブラリ編（第 2 版）』のあとがきをお読みいただきたい。

3

1973 ~ 1976

ネットワークの登場

1973 年 (昭和 48 年) になって、編集後記に初めてネットワークが登場する。

> 今回は昨年来当センターと九州工業大学の計算機センターとの間で、計画されてきた 2400bps 回線による計算機結合について、センター側の説明を掲載しました。将来他の大学等でも計画される場合の参考になり、多くのセンターとの結合がすすんでいくことも、考えられるかもしれません。
>
> (竹下記)
>
> *Vol.6, No.3, 1973.*

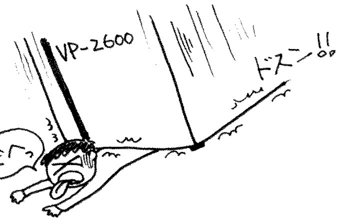
時代は見事竹下さんの予言通りに進んだ。計算機センターどころか、各研究室の計算機を結合する学内 LAN が九州大学で完成するのは、この 21 年後である。

計算機とエアコン

> 先日、ロビーの空調について投書がありましたが、計算機に空調はつきもの。一年中一定の室温を保つため、夏は外気との差が大きくなり、2 階の受付・ロビー・相談室なども、それに伴って、室温が低くなっています。冷えすぎと感じられるかもしれませんが、ご了承下さい。
>
> (S・T 記)
>
> *Vol.6, No.4, 1973.*

計算機を高速にするためには、 LSI の集積度をあげて信号が配線を走る時間を少なくする必要がある。しかし、集積度をあげると、それにともなって熱密度が高くなり、放っておくと計算機は自身の熱で熔けてしまう。現在の VP2600/10 の 8 トンほどある「ばかでかい」体のほとんどは、実は電源部分と冷却装置から出来ている。しかもそれでも熱対策が不足で、常に計算機の外気温度を一定に保つ空調が計算機を収容する建物自身に必要になる。

スーパーコンピュータを動かす時は、常にこの空調と電気代が悩みの種となる。もちろん床がぬけないことも大事である。まだその様な事故は寡聞にして知らないが、頭の上から数トンのスーパーコンピュータが降ってきたらまず助からない。



第一次オイルショックの襲来

1973 年 10 月にエジプト・シリア連合軍がイスラエルに先制攻撃をしかけて始まった第 4 次中東戦争は、センターに深刻な被害をもたらした。第一次オイルショックが襲来したためである。 *Vol.7, No.1* の編集後記の出だしの途切れ途切れの文章が当時の狼狽を物語る。

> 昨年秋以来、日本中をおそったパニックの嵐を、他にもれず、センターも、まともに受けて、皆様ご承知のように、ラインプリンタ用紙の節減をおこなうことにいたしました。内情を 1 つ申しあげれば、用紙の原価の変動たるや、すさまじく、昨年 1 月には 1 枚 1 円 9 銭だったのが、 11 月 1 円 95 銭、 12 月 3 円 50 銭、本年 1 月 5 円とあれよあれよという間にあがってしまいました。何とか用紙を使わずにすむ方法はないかと考えられたのが、現在の姿です。今までのスペースのたっぷりある出力結果に見なれた目には、どんなにうつりましたでしょうか？今後、皆様のご協力をおねがいいたします。
>
> (S・ T 記)
>
> *Vol.7, No.1, 1974.*

上のように、センターでは出力リストの処理様式を変更して紙の節約に努めた。また、ラインプリンタの出力頁数・出力行数に制限をかけ、特別なジョブ以外は 200 頁または 20,000 行を越えた場合、出力が打ち切られる措置がとられた。

センター、物価高に悩む

1974 年（昭和 49 年）は、計算機システムの入れ換えが行なわれた。仮センターから頑張ってきた FACOM 230–60 が FACOM 230–75 に 9 月から移行された。しかし、予算はあまりつかなかったようで、編集後記にも「この物価高にもかかわらず、大学・研究所の予算はほとんど増額されない。ただ、計算だけをやっておれるものでもないのに.........」という愚痴が見られる。

タンスのような FACOM 230–75

お金のないセンターの倹約はまだ続く。

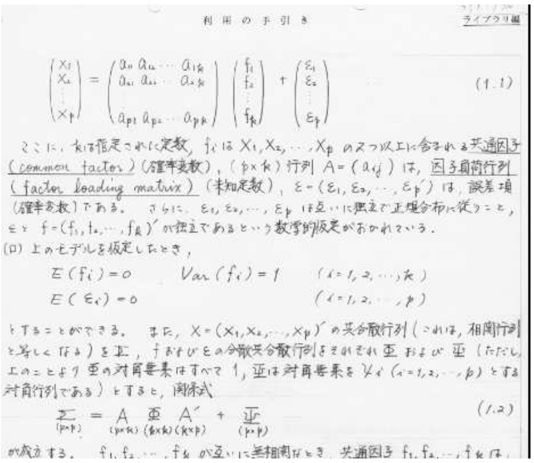
> 利用者の中には、前号 (広報 Vol.7 No.4) を手にされて、“おや？”と思われた方もありましょう。当センターでは、 LP 用紙、カードなどの資源節約を心がけてきましたが、前号より、広報の印刷について、いままでの写植印刷からタイプ印刷に変更することにしました。この両者は、文字をひろうところが異るだけで、後の行程は、同じであると聞いています。それでも、編集子は、どんなになるのか不安を感じていました。できあがって

みて、“そんなに悪くなかったなぁ”とホッとしているところです。なお、利用の手引についても、同様にしたいと考えております。

また、利用の手引ライブラリ編は、今年から、オフセット印刷となります。これは、経費もさることながら、原稿の完成から手引の完成まで、期間がかかりすぎる点を改善するために、おこなったものです。学会の予稿集等で、こういったものを見かけますが...。

(S・T 記)
Vol.8, No.1, 1975.

筆者の手元には、このオフセット原稿の元の手書きの原稿が残っている。



利用の手引き　ライブラリ編

$$\begin{pmatrix} X_1 \\ X_2 \\ \vdots \\ X_p \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1k} \\ a_{21} & a_{22} & \cdots & a_{2k} \\ & & & \\ a_{p1} & a_{p2} & \cdots & a_{pk} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} f_1 \\ f_2 \\ \vdots \\ f_k \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} \varepsilon_1 \\ \varepsilon_2 \\ \vdots \\ \varepsilon_p \end{pmatrix} \qquad (1.1)$$

ここに，kは指定された定数，f_iは$X_1, X_2, \cdots, X_p$の2つ以上に含まれる共通因子(common factor)(確率変数)，$(p \times k)$行列$A=(a_{ij})$は，因子負荷行列(factor loading matrix)(未知定数)，$\varepsilon=(\varepsilon_1, \varepsilon_2, \cdots, \varepsilon_p)'$は，誤差項(確率変数)である。さらに，$\varepsilon_1, \varepsilon_2, \cdots, \varepsilon_p$は互いに独立で正規分布に従うこと，$\varepsilon$と$f=(f_1, f_2, \cdots, f_k)'$が独立であるという数学的仮定がおかれている．

(ロ) 上のモデルを仮定したとき，

$$E(f_i)=0 \qquad Var(f_i)=1 \qquad (i=1,2,\cdots,k)$$

$$E(\varepsilon_i)=0 \qquad (i=1,2,\cdots,p)$$

とすることができる。また，$X=(X_1, X_2, \cdots, X_p)'$の共分散行列(これは，相関行列と等しくなる)を$\Sigma$，$f$および$\varepsilon$の分散共分散行列をそれぞれ$\Phi$および$\Psi$(ただし，上のことより$\Phi$の対角要素はすべて1，$\Psi$は対角要素を$\psi_i$ $(i=1,2,\cdots,p)$とする対角行列である)とすると，関係式

$$\underset{(p\times p)}{\Sigma} = \underset{(p\times k)}{A}\ \underset{(k\times k)}{\Phi}\ \underset{(k\times p)}{A'} + \underset{(p\times p)}{\Psi} \qquad (1.2)$$

が成立する。$f_1, f_2, \cdots, f_k$が互いに無相関なとき，共通因子$f_1, f_2, \cdots, f_k$は，

手書きの『ライブラリ編』原稿

たしかに、活字を拾うことなく、当時のタイプライターの型で、原稿にある

$$\underbrace{\Sigma}_{p\times p} = \underbrace{A}_{p\times k}\underbrace{A^T}_{k\times p} + \underbrace{\Psi}_{p\times p}$$

とか

$$\begin{pmatrix} X_1 \\ X_2 \\ \vdots \\ X_p \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1k} \\ a_{21} & a_{22} & \cdots & a_{2k} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{p1} & a_{p2} & \cdots & a_{pk} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} f_1 \\ f_2 \\ \vdots \\ f_k \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} \varepsilon_1 \\ \varepsilon_2 \\ \vdots \\ \varepsilon_p \end{pmatrix} \qquad (1)$$

とかを表現することは出来なかったと思われる。センターが *Prof. Dr. Donald E. Knuth* [3] の偉大さを知るのは、それから 15 年以上先になる。

センターへの苦情を聞く会

6 月の初めに、利用者のつもりつもった苦情をはきだしていただこうと（センターとしては、つらいことなのですが）、「センターへの苦情を聞く会」を催しました。多くの利用者がこられて、いろいろのご意見を言われるであろうと期待していた（不安をつのらせていた？）のですが、出席者は、センターで見かける顔ぶれになりました。そのときの模様を、本誌に掲載いたしました。こういった催しは、定期的には、プログラム相談員連絡会に含めておりますので、その機会に大いに利用していただきたいと思います。

(S・T 記)
Vol.8, No.3, 1975.

[3] TeX の作者

「センターへの苦情を聞く会」は 1975 年(昭和 50 年)の 6 月 4 日に開催された。OS 入れ換えによりトラブルが続き、さぞや利用者が文句を言ってくるだろうと構えていたようであるが、出席者は少数であり、広報記事を読む限りは、オープンカードリーダーの使い方とか、XY プロッタの使い方とか TSS のレスポンスが遅いですなといった苦情が寄せられた程度で、怒り心頭に達した利用者からセンターが猛烈な突き上げを食らった様子は伺えない。

初めての私事

Vol.8, No.4 から広報の編集担当が交替する。そして、それまででは利用者へのお知らせに徹していた編集後記に初めて執筆者個人のことが載った。

> 今回より広報の担当が変りました。"編集"などには全く能力がないと思っていただけにどれだけやれるか心配ですが、できる限り頑張ります。どしどし御意見をお寄せください。
>
> (N.K 記)
> *Vol.8, No.4, 1975.*

デバッグ室 (1977 年頃)

講習会のアンケート調査

> 来年度の講習会年間計画がまとまりました。御覧になるとおわかりかと思いますが、従来とやり方を変えてみました。言語に関する講習会を減らし、ジョブ制御マクロ講習会や、9 月末の初心者講習会などにもみられるように、九大センターのシステムに即応した内容を主にとり入れています。なお各講習会では、アンケートをとるように計画しています。それによって、より有意義な講習会のあり方を考えていきたいと思っています。一年後の成果が期待されるところです。
>
> (N.K 記)
> *Vol.9, No.1, 1976.*

講習会のアンケートは現在も続いている。私もセンターに赴任する前に、講習会を受けにいったことがある。そのときは「アンケートとは悪口を書くものだ」という使命感から、たくさん変なことを書いた憶えがある。今になってもっと建設的な提案をすべきであったと反省している。ごめんなさい。

広報への投稿記事

広報 *Vol.9, No.2* から *Vol.13, No.3* まで、5 年以上にわたって一人が編集後記を担当することになる。イニシャルは“Y.S”さん。文章を読めば分かるように女性である。Y.S さんの後もそうであるが、編集後記を書く人は女性が多い。

> 今号には利用者からの投稿記事が掲載されています。九大農学部の大学院学生、山中守氏からお寄せいただいたものです。広報には“利用者のページ”という項目が設けられており、誰でも自由に投稿することができます。計算機に関することでしたら、経験談調、学術論文調、その他何でも結構です。“投稿のしおり”を参照の上、どしどし御応募下さい。
>
> (Y.S 記)
> *Vol.9, No.3, 1976.*

広報の投稿原稿の立場はかなり微妙なもので、原稿料はもらえないし、業績としてのカウントも難しい。唯一残された手は、連載記事を書き、それをまとめて本にして印税を狙う手である。

初のエッセイ

先ほど紹介した Y.S さんは上手な文章を書かれる方で、編集後記でエッセイ風の文章を書いた最初の人になる。

> 私にとって 2? 回目の秋も、何の変りばえもなしにすぎ去っていこうとしています。そして、2? 回目の冬がやってきます。雪の好きな私は雪なしの冬など考えたくもないのですが、南国に住む悲しさで、いつも雪なしの冬に甘んじています。かまくら、雪そり、雪投げ、雪だるま......考えれば、どれもこれもメルヘンタッチの大刷毛で私の心をなぞります。見渡す限り雪また雪の景色は、何だか心をピーンと洗い清めてくれる自然の力に溢れているようです。2? 回目の冬は、果して南国の空から大量の雪が舞いおりてきますでしょうか。
>
> (Y.S 記)
> *Vol.9, No.4, 1976.*

以前冬に北海道に行ったとき見た、雪かきに精を出す土地の人を思うと、やはりメルヘンタッチの刷毛（はけ）はスキー場に降る大量の雪の中で振り回し、雪はその他の住宅地には降らない方がいいと考える。

最近は電子メールが急速に普及して、たとえば、セミナーはいつするとか、会議の招集や学会原稿の取りまとめから、飲み会は何処にしようかとか、下手すると男女の告白も電子メールの中にこっそり入り込む[4]時代である。そのため声を聞く以外にも、相手がどのような文章を書くかがよくわかるようになった。そして、恥ずかしいことに筆者はやっと最近になって、男と女の書く文章は全然違うことに気付いた。それは、女性の方が

“？？？？？”や “！！！！！！”や “.................”

をめったやたらと多用する事実も含めた文章の構成からの差である。

別に、これ以上結論はない。ただ気付いただけである。

[4]現実に見たことはないが、話はよく聞く。中には外見とは全く違う文章を書く人もいる。

4

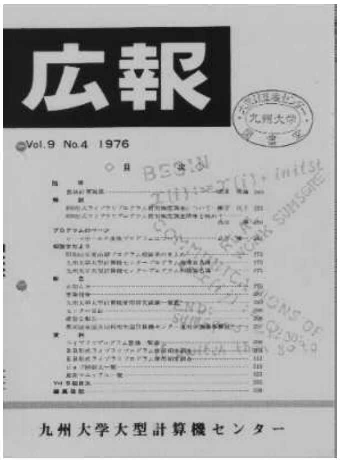
1977～1980

広報、渋いトーンに衣変えする

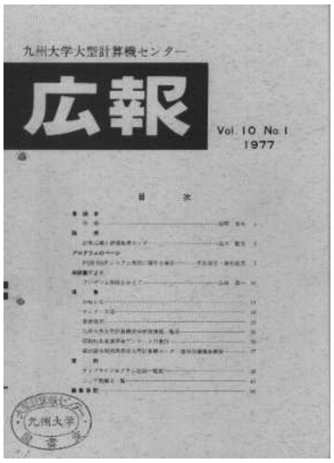
1977 年 (昭和 52 年) の *Vol.10, No.1* では、利用者にとってはどうでもいいことだが、広報に携わる者にとっては大きなイベントがあった。

> 広報 Vol.10, No.1 をお届けします。
>
> 広報創刊以来、長い間親しんでいただきました表紙が、いままでのパッとした配色から落着いた渋いトーンに衣変えしました。(中略) 有名デザイナーにでも頼めは、事は簡単だったのかもしれませんが、趣味、嗜好の異なる人達が集って、ああでもない、こうでもないと話しあいながら決めていくということは、中々時間のかかる大変な作業ではあります。
>
> ともかくも、改装なったわが広報、外づらばかりでなく内容充実のためにも力を注いでいくつもりです。よろしくお力ぞえくださいますようお願いします。
>
> (Y.S 記)
>
> *Vol.10, No.1, 1977.*

白黒なので“渋さ”が良く分からないと思うが、改装前と改装後を並べて見る。



Vol.9, No.4
改装前



Vol.10, No.1
改装後

1977 年に変更された広報の表紙は、その後 17 年以上変更なく今日に至っている。

上の編集後記の苦労話からよく伝わってくるように、どこでも当てはまる事実として、人はデザインに関して偉そうに「いちゃもん」をつけたがる。文章や音楽に関してはだんまりを決め込む人も、ことデザインになると「ここの色は良くないな」とか「バランス的にどう

かな」とか、おのれ自身も根拠のよくわからない感覚を振り回しクドクド文句をつけ、原案者をいらいらさせる。文章は上手な方がいいし、歌もうまい方がいいにきまっている。それ以上に、デザインはしっかり勉強した方がいい。また、よほど自信がない限り、表紙の案の担当なんかには決してならないことである。

ちなみに、現在センターは表紙の改訂を検討している。

春の嵐、スカートを襲う

1977 年の春になって、 Y.S さんはひどい目に逢う。

> 春の嵐は、気まぐれに、怒ったように突然やってきて、私の新調の服も靴も何もかもずぶ濡れにしてしまいました。傘をさしてはいたのですが、強い風と大粒の雨が仲良くやってくるので、何の役にもたたないのです。おかげさまで私のスカートは、ヒダがとれてしまって見るも無惨な姿。
>
> 春は菜の花色、れんげ色、若緑の萌えるやさしき乙女の季節 — しかし、お気をつけあそばせ。時折、激しいすすり泣きの如く、春の嵐は吹き荒れるようです。
>
> (Y.S 記)
>
> *Vol.10, No.2, 1977.*

無惨なスカートを見て嘆いているうちに、計算機のシステム入れ換え作業で、センターはてんてこまいになる。

> 新システムに明け新システムに暮れるセンターの今日この頃。関係者は夏休み返上で作業を進めているものの、何せ相手は計算機。こちらに対する思いやりなどあろうはずもなく、ただひたすら上げ膳、据膳のお殿様のようにセンタールーチンや運用プログラムを食べさせてくれるのを待っています。
>
> 一方、食べさせる側は大変、如何に美味しく調理し、如何に豪華に盛りつけるか。お殿様のご機嫌伺いは、冷や汗まじりのロジカルヒステリーツアー[5]というところでしょうか？
>
> (Y.S 記)
>
> *Vol.10, No.3, 1977.*

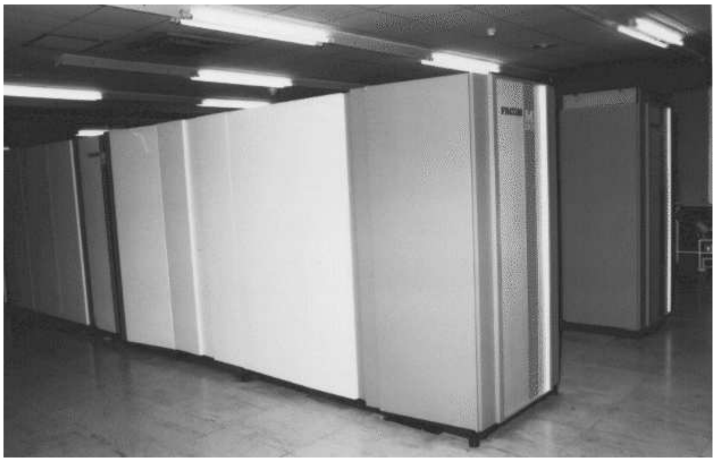
去りゆく老兵

計算機システムの入れ換えは 1977 年（昭和 52 年）の 10 月に行なわれる。

> 4 年の間、利用者へのサービスに努めてきた F230-75 が 10 月 3 日に撤去され、 10 月 4 日に M-190 が改修なったフロアに設置されました。白い衣で統一された姿は、どこかねずみ色の F230-75 よりスマートに見えました。高度な能力をもつ M-190 に座をあけ渡した F230-75。大型コンピュータの新旧交代の模様に、私は何故か“老兵は消え去るのみ”という文句を思い浮べてしまいます。
>
> (Y.S 記)
>
> *Vol.10, No.3* 別冊 「新システム特別号」, *1977.*

「スマートに見えた」 FACOM M-190 も、しかし、そのわずか二年後に去っていくことになる。

[5]もしかしたらこの意味を解さない人がいるかも知れないので一応フォローすると、 The Beatles の “Magical Mystery Tour” からのもじり。



スマートな FACOM M-190

Nostalgia

1978 年（昭和 53 年）に入る。この年は新システム披露式がセンターで行なわれた。

新システム披露式の受付の模様
1978 年 4 月 22 日

編集後記に目を転じると、 *Vol.11, No.2* に秀逸なエッセイが載っている。

> 編集後記を書くべくペンをとって、書くべき何事も見つからないので、ぼんやり外を見ていると、目には小鳥、耳には小鳥のさえずる声が入ってきました。我が家には 17 羽の文鳥がいて、今のところ 5 羽の子鳥がピーチクパーチクうるさい限りですが、よく見ると、ほぼ同時期に生まれたにもかかわらず、大きさが様々で、さしずめ、山下さん家の 5 つ子ちゃんのようであります。いちばん小さい子鳥は、ヨチヨチ飛びで兄さん姉さんのようにエサのところまでなかなか行けません。何度も何度も飛ぼうと試みているのが私の目にも判るのですが、飛ぶのが怖いのか、結局あきらめているようです。自分以外の鳥が、自由に飛びまわってエサをつついたり、水あびしているのをとても羨しそうに見ている。その小さい子鳥も、それ故に百倍も可愛いのに、いつしか他の助けなど全く必要としない親鳥になってしまうのです。ああ、今のままでいてほしい、大きくなってほしくないと、鳥かごをのぞくたびに思ってしまいます。それは、失われたもの（漠然とした）に対する激しいノスタルジーをよびおこすのに似ています。あまりにも完備され、あまりにも成長したものに対する拒絶反応です。鳥かごの中の世界は、のどかで、楽しげですが、かごの鳥の

悲哀も確かにあるのでしょう。だから、そんなことも知らぬげにピーチクパーチク親鳥にエサをねだっている、小さい子鳥に余計、心ひかれるのかもしれません。
　今日は、快晴、半そでの服に、ひんやりとした大気が気持ちのよい5月の下旬です。

(Y.S 記)
Vol.11, No.2, 1978.

センター、干からびる

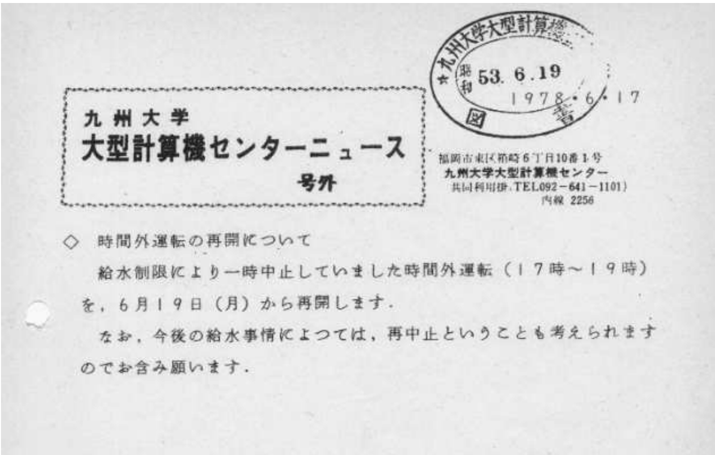
1978年（昭和53年）は福岡地方を空前の水不足が襲った。センターは計算機の空調の運転や生活用水に、夏季は一時間あたり2トンの水が当時必要であった。

> 残暑お見舞申し上げます。
> 　今年は、ひときわ暑い上に、ほとんど雨の降らない夏でした。特に、福岡市は近来にない水不足に悩まされ、給水制限（令？）が敷かれてほぼ3カ月になろうとしています。いつもながら願いさげの台風も、こうすべてが干からびてくると、ほどよい激しさで吹きあれてほしいものだ、と思うのは手前勝手な望みでしょうか。錬金術ならぬ錬水術でも考えてみたくなる心境の、日でり厳しい福岡市です。
> 　当センターでも、この水不足のため時間外運転時間を短縮しております。今しばらくご辛抱いただきますようお願いします。
>
> (Y.S 記)
> *Vol.11, No.3, 1978.*

センターは6月1日から、時間外の計算機運転をストップした。計算機の動く時間は、朝の9時から夕方5時までに制限された。時間外運転は6月19日から再開したが、またまた深刻な水不足に陥り、8月1日から10月一杯まで再び時間外運転がストップする。

センターニュース号外

また、この時期、時間外運転の再開を知らせるセンターニュース号外が6月17日付けで出された。「号外」の部分が手書きになっているところに趣がある。現在のところ、センターが出した号外はこれだけである。



九州大学
大型計算機センターニュース
号外

九州大学大型計算機 昭和53.6.19 図書

1978・6・17

福岡市東区箱崎6丁目10番1号
九州大学大型計算機センター
共同利用掛（TEL092−641−1101）
内線 2256

◇ 時間外運転の再開について
　給水制限により一時中止していました時間外運転（17時～19時）を，6月19日（月）から再開します．
　なお，今後の給水事情によつては，再中止ということも考えられますのでお含み願います．

センターニュース号外 (1978年6月)

書を捨てず街に出る

異常な暑さの夏が過ぎた後、1978 年（昭和 53 年）の福岡地方は寒い寒い冬を迎えた。

> 暑い夏から寒い冬へ、今年は極端に特徴的な二つの季節を迎えました。過ぎたるは及ばざるが如しと自然に向かって教えてみても、当然、聞いてくれるわけではなし、せめて、暑さ寒さをしのぐため、我々人間の方が防備を固めるというならわしに従うしかありません。夏はタンクトップに、クーラーに、冬は毛皮のコートに、セントラルヒーティングにと、文化的でファッショナブルな防備固めは、ますます文化的かつファッション性を追い求め、"狭いながらも楽しい我が家""貧しいながらも美しい人生"などという感覚は、すでに日本人からとりさられてしまったかのようです。たとえるならば、漆塗りの豪華な重箱に、手のかからないインスタントおせち料理を詰めこんだようなものです。それでもおいしいと思う時代になりつつあるのでしょうか。福岡市の繁華街を歩いていて、そんなことを感じました。
>
> (Y.S)
> *Vol.11, No.4, 1978.*

外側から加えられる刺激に対して、身体の恒常性を保とうとする働きを「ホメオスタシス」と呼ぶ。人間は体温を常に一定に保つため、外界の変化に対して自分の身体を調節する機能を有している。が、実際はどうなっているかといえば、上の編集後記にあるように、人はクーラーやセントラルヒーティングを駆使して、自分が外界に対して順応する代わりに、環境自体を自分の方に適応させようとする「逆ホメオスタシス」を進化させて今日に至っている。

"狭いながらも楽しい我が家"、"貧しいながらも美しい人生"という感覚を 1978 年当時の人はなくしていたようであるが、現在も住宅環境や物価水準はとても良くなったように思えない。「楽しい我が家にしたいが狭すぎる」、「美しく生きたいが貧しすぎる」という状態は同じである。外界を自分の好みにあわせる逆ホメオスタシスをするためには、多少のお金が必要である。

創立 10 周年を迎える

1979 年（昭和 54 年）で、九州大学大型計算機センターは仮センターでシステムが稼働を開始して以来 10 年を経過する。編集後記にも、過去を回想したものが載る。これまでの十年の歩みを、当時は次のように回想していた。

> 本センターは、今年 4 月をもって創立満 10 周年を迎えることになります。古い資料をあれこれ引っぱり出して読んでみると、この 10 年の最初の日を迎えるために関係者のはらった努力は並々ならぬものがあったようです。本センターは建物建築中に米軍機が墜落するという異例の事故に加え、それをきっかけとして起った学園紛争で、1 年半もの間、建築工事を中断したままであったという異常な体験をしています。1960 年代は世界的にみても、様々な新しい価値観を生み出した激しく動きの多い年代でしたが、それはまた、古いものと新しいもの、富める者と貧しい者の対立を招き、大学においてはほとんどの大学が紛争を経験したといえるのではないでしょうか。騒然とした中からやっと完成した本センターも、現在は静かな九大キャンパスで毎日のノルマを消化しています。もし、今、同じ事が起ったとして、またもや 10 年前と同じように九大は学園紛争の坩堝と化すでしょうか。こう考えると 10 年という日々の長さを感じます。
>
> 本センターも暗中模索の時期を過ぎ、質の向上を目指す時期に入ったともいえます。創立 20 周年を迎えるころはどうなっているでしょうか。
>
> (Y.S 記)
> *Vol.12, No.1, 1979.*

センター創立 10 周年記念式典の受付の模様
1979 年 6 月 30 日

建物の増築工事開始

1979 年の秋からはセンターの建物の増築工事が開始される。

> 本センター建物増築工事で皆様には大変ご迷惑をおかけしております。特に 9 月 15 日から 2 週間近く行なわれる杭打ち工事では騒音、振動等々で落着いて仕事もできない状態が予想されます。また、計算機使用を停止しなければならない事態が生じるかもしれません。センターニュース、掲示物にご注意下さい。
>
> (Y.S 記)
> *Vol.12, No.3, 1979.*

> 本センター建物増築工事は、来年の夏あたりまでには完成する予定です。旧館も塗装を新たにして新年を迎えようとしています。また、計算機も今年 11 月から FACOM M-200 にレベルアップしました。これにより、倍精度演算速度が速くなったということです。
>
> (Y.S 記)
> *Vol.12, No.4, 1979.*

Q&A

明けて 1980 年（昭和 55 年）に入る。

> 来号から、 Q&A 欄を新設します。これは、昨年の 12 月、プログラム相談員連絡会においてセンター利用に関する質疑応答、ノウハウならびにプログラム交換等に関する広報紙面を設けたらどうかという意見が出され、その後プログラム相談員の方々に情報の提供をお願いしていたのですが、応答がなく、しばらく掲載を見合わせていたものです。 question and answer 形式ですので、センターを利用する上での question をお持ちの方は、ご意見をお寄せください。
>
> (Y.S 記)
> *Vol.13, No.2, 1980.*

この、プログラム相談の質疑応答をまとめるという Q&A のデータ蓄積は、この後ずっと（現在も）懸案課題として残る。システムやソフトウェアの変更が激しいセンターでは、常に最新の情報にデータを update する必要があるが、そのようなデータベースを誰が責任を持って管理するかというのは、コストのかかる仕事であり、なんだかんだで現在にまで至っている。一応広報の Q&A コーナーは、断続的に最近まで続いている。

改築工事完了

やかましかった改築工事が完了し、1980 年 5 月 31 日にセンター建物増築の記念式典が行なわれた。1978, 1979, 1980 と 3 年連続の記念式典である。

改築によって建物がどのようになったか比較してみる。

1970 年

1981 年

写真の向かって右に「びよーん」と建物が延びていることが分かる。1980 年に増築したセンター建物は、現在も外見はこのままの勇姿を保っているが、内部はかなりくたびれてきた。

ネタ捜し

これまで見てきた編集後記は、比較的長期にわたって、一人が執筆を担当してきた。*Vol.13, No.4* からは、これまでの Y.S さんが交代し、以後は一人が長期にわたって編集後記を書くことはなくなり、数人が交代で執筆することになる。また、センターも安定期に入り、計算機に関する緊急のお知らせ記事は少なくなる。しかし、それだけ執筆者はネタ捜しに苦労することになる。

> ジングルベル、クリスマスツリー、いくつになっても心が浮き浮きする 12 月です。クリスマスまでの心の非常な高まりと、そのあとにくる寂しさ。春が来るまで冬ごもりでもしましょうか。
>
> 今年は冬らしい冬であってほしいものです。
>
> 1981 年が、皆様にとって良い年でありますようにお祈りします。
>
> (Y.Y 記)
>
> *Vol.13, No.4, 1980.*

なぜクリスマスまでは心が高まって、そのあと寂しくなるのかを、何が起きるのかの具体例を含めて是非知りたいところであるが、良く考えれば余計な詮索である。

5

1981 ~ 1984

たれ目ぎみの目が少々つり上がる

まずは落ち込んだ編集後記から。

> 80 年代は人類にとって試練の時代とも言われ、去年はいろいろとありましたけども、今年も辛い一年になりそう。問題が数多く山積みされています。それでも今年になってようやく、米大使館人質問題も解決し、明るい希望ももてました。又，80 年代は世代交替の時でもありそう、新しいスタートが現れそうで楽しみです。
>
> 春ももうすぐそこ。長いトンネルから抜け出せるような気持ち。ワクワクします。
>
> A.C
> *Vol.14, No.1, 1981.*

> 利用者の方々には少々御迷惑をかけますが、事務手続簡素化のために、九大でも OCR を登録申請に利用することになりました。机の横に山と積まれた申請書の束をみるにつけて、たれ目ぎみの目も少々つり上がりそうです。
>
> Y.Y
> *Vol.14, No.1, 1981.*

OCR とは optical character reader の略で、文字などを直接機械に読み取らせる装置のこと。センターでは既に 1980 年の 6 月から利用者に公開していた。

いずれにしても、ここでは、 A.C さんがかなりのスランプであり、 Y.Y さんが少々たれ目であることを確認するのみである。

Fortran の話

次の号には、 Fortran についての大変おもしろい編集後記が載った。その一部を紹介する。当時はバラバラだった Fortran の統一の気運が高まった頃であった。

> 一方、おなじみの Fortran。有識者にはすこぶる評判悪い。生みの親バッカスがほぞをかめば、さる大先生は Fortran などというものがこの世に存在したことを忘れ去る日は早ければ早いほどよいのであ~るとのたまわれる。センターでは、プログラム言語使用率の 96% が Fortran である。講習会も Fortran は大盛況だが Pascal はパッとしない。センターでは Fortran IV (1966 Fortran) のほかに 1 年前から Fortran 77 のプロセッサを用意しているが利用率は高くない。最近、 IBM は、 Fortran 77 に準拠した VS FORTRAN の出荷を始めた。センターの富士通製 Fortran 77 プロセッサもこれに対抗して早ければ 7 月にも改版される。さらに、現在 3 本ある Fortran プロセッサをゆくゆく Fortran 77 一本に統合する気運がある。 Fortran 利用者は早目に Fortran 77 の勉強を。

(松尾記)
Vol.14, No.2, 1981.

センターで Fortran 77 一本にコンパイラが統合されるのはこの記事が出た 3 年後の 1984 年 5 月である。そして、現在国内では Fortran 90 への移行が起こりつつあり、どうやら Fortran は今世紀中は安泰のようである。

利用者の待ち行列が出る

> これからはジョブが多くなる時期に入り、センター内の設置端末も利用度が高く利用者の待ち行列がでている状況です。そこで九月末には、ターミナル室に FACOM 6262KB3 ディスプレイ装置（6 台）と、FACOM 6251K2 ディスプレイ装置（2 台）が増設されますので幾分か解決されると思います。又、今まで日本語ラインプリンター出力結果は、ユーザ自身で持っていくことができましたが、九月末には、クローズ処理となり、仕分棚の方へ返却します。

(S.Y)
Vol.14, No.3, 1981.

信用しない人がいるといけないので、証拠を見せる。

混み合うセンター受付前

編集後記を書く人

焦点を編集後記を書く人物に当ててみる。広報を編集するグループは、センター内では広報教育室とよばれている。広報教育室には、非常勤の人や、慣れさせる目的で新人が放りこまれたりして、右も左もわからないうちに編集後記の執筆を命じられたりする。そのような"頼りない"文章を二つばかり紹介する。

> 秋へ一歩一歩近づいているのに、残暑のきびしい今日近頃。私が広報教育室の一員となって 4 カ月が過ぎました。仕事にも少し慣れて余裕が出てきたような感じです。しかし、利用する気持ちを忘れず、良い情報を正確に届けるため、一貫充実した広報を作るよう努力していきたいと思います。

(S.I)
Vol.14, No.3, 1981.

「広報」編集・発刊の仕事の一端に初めて携わり、今は反省ばかりです。何をどう手がけてよいのかわからず、子供の使い同様で、同じ仕事に携わっている方々に御迷惑をおかけしたことと思います。一日も早く、今の仕事に慣れるよう努力したいと思います。

(K.I)
Vol.15, No.1, 1982.

マニュアルとにらめっこ

編集後記のパターンの一つとして、自分の身近な話題をとっかかりとして、世情に思いをはせ“流れを”語ろうとする企てがある。以下はその分類にあてはまるまとまった文章。

近ごろ、パソコンやマイコンがテレビの CM によく出ているが、私も 2 カ月程前からパソコンを遊び程度にいじっている。電源を投入するだけで、即動作し、簡単にグラフィック機能が使えるのでテレビゲームも苦労する事なく作成できる。この手軽さが爆発的な人気を集めているのだろう。

しかし、科学技術計算にはどうしても演算速度等で大型機に立ち打ちできない。 ......当然であろう。

ところで、現在、パソコンをセンターの端末として使用する、いわゆるインテリジェント端末の数が 50 台を越えている。これは自分自身のコンピューターを持ち、長時間ジョブは大型機に依頼するという、言わばパソコンと大型機の長所を兼ね備えたパソコン使用法である。この方法は今後ますます増え続ける事であろう。将来 1 人 1 台のコンピューター時代に乗り遅れる事のない様、マニュアルとにらめっこしている今日、このごろである。

(K.I)
Vol.15, No.3, 1982.

上の文章で“大型機”を“スーパーコンピュータ”に置き換え、“パソコン”を“パソコンやワークステーション”に言い換えると、 K.I さんの予言は、ずばり現在の計算機環境を言い当てている。見事な慧眼である。 K.I さんが現在の 1 人 1 台のコンピューター時代に乗り遅れていないことを祈る。

余談だが筆者は、この年高校受験であり、試験会場で当時流行の任天堂の「ゲームウォッチ」を机の上において受験し、試験監督から大いに怪しまれた記憶がある。

グラフィック・ステーション
1981 年当時

サラサラしたショートカット

編集後記によくあるもう一つのパターンに、春夏秋冬の移りかわりをネタにする「季節もの」がある。季節ものはもっぱら女性が得意とする。

次の文章は別にセンター広報でなくても、いろいろな場合に流用が効きそうである。

> 年毎に暑くなるのが早くなってゆくように最近感じるのですが、いかがでしょうか。学生時代は、6 月から制服の衣替えと決まっていた為か、半袖になるのは 6 月からと頭から決め込んでいたものですが、服が自由になって以来、半袖を着始める時期が早くなりつつあり、従って夏だと実感するのも早くなっているようです。
>
> 夏のイメージというと開放的・活動的という言葉で表現できると思います。首のつけ根までのブラウスのボタンを、1 個といわず 2 個程はずして着るのも夏らしい。ノースリーブも夏特有のもの。髪も、サラサラしたショートカットが夏にふさわしい。すべて開放的・活動的です。ですが、それらに限度が有るように、夏の過し方にも限度が有ります。栄養・睡眠に気をつけ、夏バテすることなく、この夏を乗り切りましょう。
>
> (K.I.)
> *Vol.16, No.4, 1983.*

全く賛成で、度を過ぎて、ブラウスのボタンを更に 3 個も 4 個も外して、頭をスポーツ刈りにされて歩かれたら困ってしまう。1983 年 (昭和 58 年) の夏は例年になく暑かったようである。

晩秋の夜の微笑

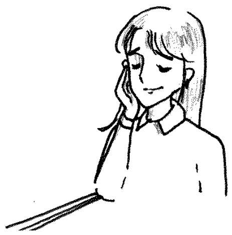
83 年最後の編集後記はかなり異彩を放っている。全文を紹介すると、

> “高度情報社会”といういま　流行(はやり)言葉がひしめくうちに現実のものへといった様相となって来た折、ふと、“学ぶに暇あらずと謂う者は暇ありと雖ども亦学ぶに能わず”という言葉が頭の中を横切る。これも晩秋の夜のひとこまと、微笑んでみたが……。
>
> (N.M)
> *Vol.16, No.6, 1983.*

作者の N.M さんはおそらく女性であろう。「理由は？」と問われると困ってしまうが、強いてあげれば、男は“晩秋の夜のひとこま”とかいった言い回しを使えるほど感受性が豊かではなかろうという消去法が根拠である。

晩秋の夜に机に頬づえをついて「にっこり」というより「にやっ」とする N.M さんの様子が浮かんでくるが、「……」の余韻がなんとなく不気味である。

「しーん」とした夜に他人から見せられる微笑には気をつけた方がいい。



こんな感じかな

こっちだったりして…

ラムちゃんとロムちゃん

「季節もの」の典型をもう一つ。

今年の冬は九州でもよく雪が降りました。夕方から降り始めた雪が、あれよあれよと言うまに積もって、周りをすっかり雪国に変えます。始めのうちはうれしくてしょうがない雪も、何度も積もると、だんだんとうんざりしてきます。雪の多い地方の人にとっては、たいした雪でもないのにと思われるでしょうが、道路は渋滞するし、道を歩くと滑るし、体を動かすのもなんとなく億劫になってきます。

やっと桜の便りもちらほらと、早く春がこないかと例年以上に待ち遠しい思いです。

(Y.Y)
Vol.17, No.2, 1984.

次は当時のセンターでの流行が伺える。

春のゴールデンウィーク何ともうれしいものです。

センターも 5 月から MSPE20 に移行となり効率が良くなりそうです。そこでコンピュータに使われる言葉で今ちょっと流行言葉があります。RAM(ラム) と ROM(ロム) です。RAM は他人の受売りを得意になって喋る人、ROM は何時も同じ話、話し方しかしない人に使われています．．

そこで廻りを見廻してみれば頷けました。

(N.M)
Vol.17, No.3, 1984.

「いるいる」などと頷いている場合ではなくて、ある人を評する場合、口から出てくるのは大半が悪口だという（自分の）経験から類推すると、本人のいないところでいかに悪口や品定めが行なわれているか少しは廻りを見て戦慄していただきたい。といいながら、お互いが他人を“莫迦な奴”と思いながら結構うまく組織がまわるところが凄いとこではあるが。

“莫迦な奴”が出たので、ついでにある人から教えてもらった、夫婦喧嘩や恋人同志の喧嘩で男の気勢をそぐ、うまい方法を紹介する。女性の方は下の様なことを言われたら、是非お試し下さい。

夫：（情けない声で）「どうしてあんたはそんなにアホなの！？」
妻：（さらに情けない声で）「だって、あなたの妻ですもの」

オープン室（1980 年代前半）

6

1985 ~ 1988

Next one

1985 年になって、広報の担当が変わる。

・・・

今回から広報は、私達ズブの素人三人娘（ン？）が編集・校正を担当しています。何しろ校正のコの字も知らないものですから、校正便覧を片手に、ああだこうだと話し合いながら校正していきました。これで良いのだろうかという思いも残りますが、チャップリンの“Next one.”の精神で回を重ねて行きたいと思っています。

(YOU)
Vol.18, No.3, 1985.

明太子姫と狸姫

その三人の中の一人「明太子姫」の編集後記。これはすごい。

私こと明太子姫は、お正月休みに竜宮城へ帰りました。乙姫ほか魚や海草たちが首を長くして私の戻る日を待っていたと、それは喜んでくれました。

互いの近況報告もすみ、それではと計算機の話をしました。すると乙姫は、そんなに便利なものなら竜宮城にもぜひ買い入れようと言います。さすれば、かのミステリーゾーン、バミューダ三角地帯で行方不明になった魚たちの消息がわかるかもしれないと身体を乗り出し、眼を輝かせて申します。

購入資金は充分あるので問題はないのですが、ともうしますのも難破船の金銀財宝のめぼしい物は全て竜宮城に集められているからです。

次に電気をどうするかでみんなで考え込みました。評定の結果、イギリスのロイター通信も使ったという海底ケーブルを利用させてもらうことにしました。

問題はあの大型計算機をどうやって運び込むかということです。実は、亀族も飽食の時代は免れず、栄養過多で甲羅がぶよぶよしています。計算機の重みに耐えられそうにないのです。宅急便に頼むわけにもゆかず、頭を抱えておりました。

さて、どうやったら竜宮城へ運び込むことができるでしょうか。しばし、心の散歩をお楽しみ下さい。

(明太子姫)
Vol.18, No.2, 1985.

明太子姫は *Vol.18, No.5* に再び登場する。こちらは村上水軍と元の軍隊が戦うという、暗号めいた文章だが、あまりに長いので割愛する。私には明太子姫の文章は解読不能である。従って何もコメントできない。

もう一人「狸姫」は *Vol.18, No.4* に寄稿している。こちらは「チュー太郎」と「ニャンコ」という登場人物の喧嘩の話を題材に梅雨のうっとうしさを書いたものだが、これも長いのでカット。

豊かな感性

1985 年は明太子姫と狸姫の登場で、極めて異色の年(編集後記の意味で)となった。85 年の最後は YOU さんの重たい文で終る。

> 今年も多くの事件がありましたが、ロス疑惑、日航機墜落、やらせリンチ等、本人はもとより、周囲の人々の真実をも叩きつぶしてしまったり、真実のみならず、事実までも歪めてしまったことに、強い憤りを覚えた人も多いと思います。報道の世界だけでなく、私達の周りにもしばしばあることですがそれら無数の情報を厳しく取捨選択し、伝えられなかった真実までも察することのできる豊かな感性を持ちたいものですね。

(YOU)
Vol.18, No.6, 1985.

プログラム相談室(1980 年代前半)

編集後記、短くなる

明けて 1986 年。明太子姫の反動かどうか理由はわからないが、編集後記が一気に寂しくなる。 *Vol.19, No.1* の編集後記全文を紹介する。

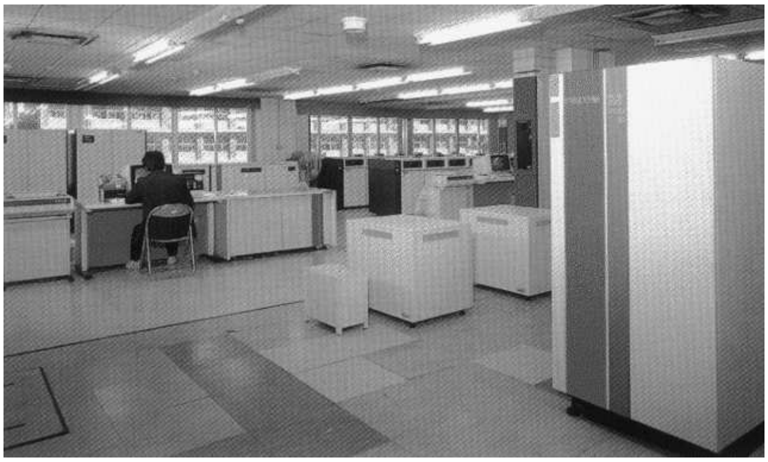
> 明けましておめでとうございます。
> 新しい年を迎えるとともに、計算機の方も、ベクトルプロセッサ(VP100)の導入により、旧システム(M382)から新システム(M380S + VP100)に変更し、1 月 6 日(月)より新システムでの運用を開始しました。

(E.W)
Vol.19, No.1, 1986.

次の号は、現在にいたるまで、最短の編集後記。全文はたったこれだけである。

> 4 月から共通利用番号制が実施されます。本文 P.152 ~ P.153 を御参照ください。

(署名なし)
Vol.19, No.2, 1986.



FACOM M380S

次の号も寂しい。

4 月から共通利用番号制の実施、センター長の交代と、センターも新しい時代を迎え、ますます活気づいています。

(署名なし)
Vol.19, No.3, 1986.

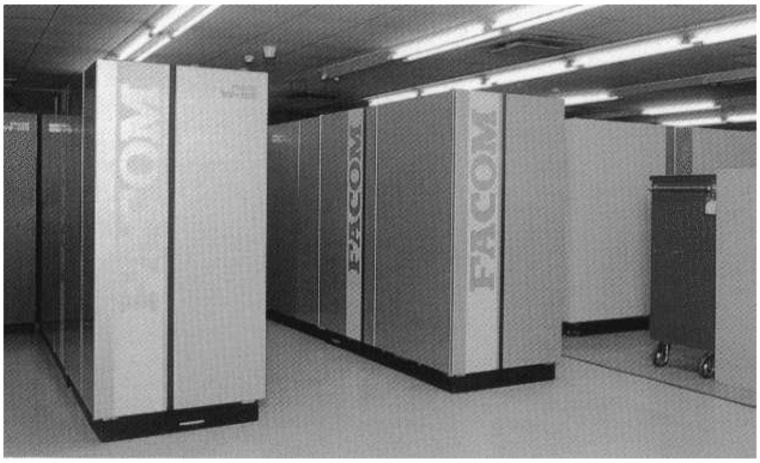
活気づいていないのは編集後記だけである。
次号になって、多少持ち直す。

梅雨もあけ、本格的な夏の到来となりました。

スーパーコンピューター・VP-100 が、本センターに昨年 12 月に導入されて以来、8 カ月が経過しましたが、利用率はまだまだ低いのが現状です。高度な計算が高速で処理できますので、計算時間の短縮によりコストを下げることも可能です。より多くの方にその有用性を理解していただき、有効に利用していただくよう希望します。

VP を使用するにあたって必要となる知識・利用法については、VP 講習会・広報等によって提供しておりますが、その他どのような対応が待たれているかについて御意見がありましたらおしらせください。

(M.I)
Vol.19, No.4, 1986.



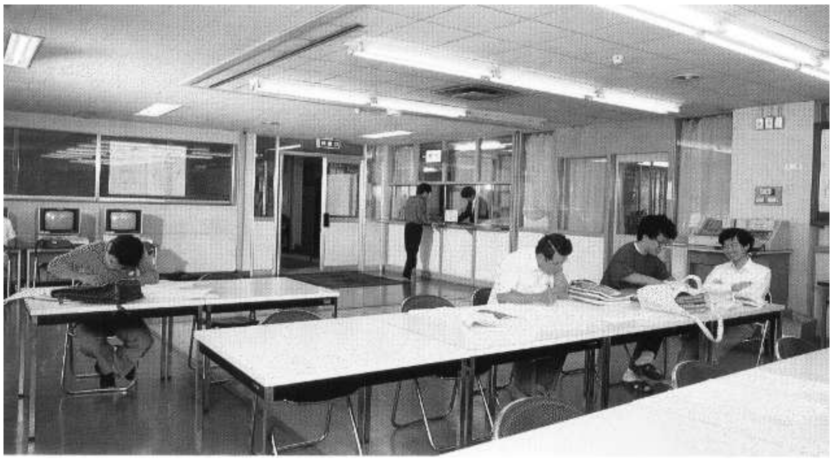
FACOM VP100

システムの増強

新システムは 1986 年（昭和 61 年）1 月に導入された。しかし、1987 年（昭和 62 年）8 月には再び更新がなされる。

> 8 月中旬に大幅なシステムの増強を行いました。M382 が M780/20 に、VP100 は VP200 にレベルアップしました。演算速度は、ほぼ 2 倍に向上しました。しかし、1 秒当たりの負担金は従来どおりですので、1 件あたりの負担金が安くなります。
>
> (署名なし)
> *Vol.20, No.5, 1987.*

1987 年の 10 月には UNIX のサービスを開始し、センター内 LAN の敷設が行なわれた。時代は確実に動いている。



1986 年当時のデバッグ室

スタッフ頑張る

年があける。

> 新年明けましておめでとうございます。今年最初の広報 Vol.21, No.1 をお届けします。昨年末には、編集スタッフの交代があり、この号を無事に出せるかどうか不安でした。これからも広報の内容充実を図るべくより一層頑張っていきたいと思います。
>
> (署名なし)
> *Vol.21, No.1, 1988.*

頑張った結果を報告する。

> 当センターでは「広報」と「センターニュース」を定期的に発行しています。1983 年（VOL.16）以降の広報には、各巻の最初の号（NO.1）に前巻の総目次を内容ごとに分類して掲載してあるので、各巻の NO.1 だけ見ていけば目的の記事がどの広報に掲載されているか調べることができるようになっています。これまでに出版された広報の数はまだ 50 冊程度で、この方法でまだなんとかこと足りますが、センターニュースの方は数が膨大（約 400 冊）なため、たぶん多くの利用者の方が記事の検索や管理に困っていることと思います。そこで、センターでは、過去に出版されたセンターニュースと広報の全目次をデータベース化する作業を開始しました。近いうちに利用者に公開できると思います。
>
> (署名なし)
> *Vol.21, No.5, 1988.*

ただし、この無署名執筆者さんは数をかぞえ損なっていたようで、この時点で広報は既に百冊前後に達していた。

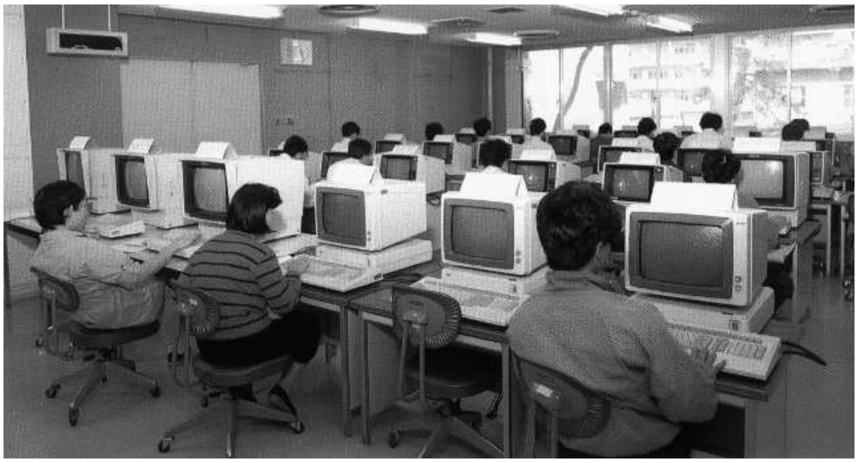
広報、センターニュースの見出しを検索する“KOHO コマンド”が公開されるのは 1989 年の暮れである。

編集スタッフの秘かな楽しみ

1988 年の最後に、広報を編集する人ならではの編集後記が掲載された。そして、以降編集後記は明太子姫の反動をやっと脱して、個人の視点がにじんだものになっていく。別に私は「編集後記とはこうあるべきだ」という意見を持っている訳ではないが、単に人の上手な文章を読むのが好きなので、この傾向は素晴らしいことだと素直に歓迎する。

> ここ数年来、当センターへの投稿原稿も、ワープロで作成されたものがその大半を占めるようになってきました。それでもたまに、手書きの原稿が届くこともあります。手書きの原稿は、読んでいると、筆跡に執筆者の性格が感じられたり、日によって人の気分が変わるように、字の書かれた調子が微妙に変化している箇所が見受けられたりして、執筆者と差し向かいで話を聴いているような気分にさせられる時があります。
>
> 編集スタッフにそういった秘かな楽しみを与えてくれる手書きの原稿に対して、ワープロ原稿にもスタッフの側からみていくつかの長所があります。ワープロは誰が打っても一様に印字されますから、達筆ゆえ（？）文字が判読しづらいといったトラブルを避けることができます。また、写真製版にかけると、執筆者の原稿をそのままの形で掲載できるため、誤植がなくなり、かつ出来上がりが執筆者のイメージと異なるといった問題も解消できることと思われます。ワープロ原稿は、編集の手間を軽減し、コストを下げ、ひいては予算を有効に使うことに役立ちますから、広報教育室に寄せられる原稿をより多く、広報に掲載できることになります。
>
> (署名なし)
> *Vol.21, No.6, 1988.*

1994 年現在の九州大学大型計算機センターの広報記事は大部分がジャストシステムの一太郎と TEX で書かれている。昔のように活字を拾うことはなくなった。もともと一太郎は汎用ワープロソフトであり、 TEX は論文作成用の“整形”システムであって、そもそも開発の思想から異なるものであるので、どちらがいいという比較はできない。



1986 年当時のオープン室

7

1989 ~ 1994

編集後記、持ちまわりになる

1989 年以降現在に至るまで、編集後記は広報の一ページまるまる使ったコーナーになる。執筆者も *Vol.22, No.4* 以降は、特別なことがない限り二人またはそれ以上が持ちまわりで担当している。完全な脱線記事もなく、無味乾燥なお知らせも減って、よくまとまった編集後記が現在まで続いている。

この年代までおりてくると、筆者の知っている人が多くなって、「この文章を書いたのはこんな人で、この人とこの人にはこんなことがあって、云々」と、実名入りで紹介したくなるが、後が怖いし、大多数の読者にとってはあまり面白くないので書かないことにする[6]。

> センターに勤め始めてようやく 1 年が過ぎた。根っからの文系人間で、計算機など見たことも触れたこともなかった私だが、よもや大型計算機センターの広報に携わることになろうとは、1 年前には知る由もなかった。情報化社会だとか、データベースだとか、ネットワークだとかいう言葉を耳にはさんだり、活字を見たりしたことくらいはあっても、何か遠い別の世界のこととしか捕らえることができなかっった。先日、何と言う気はなしに、パンセを読み返していて気づいたのだが、それは、パスカルの言うところの“幾何学の心”を持ち合わせていないからではないかと思う。（以下略）
>
> (M.)
> *Vol.22, No.1, 1989.*

この後パスカルの「パンセ」からの引用が続くが、かなりの長文なので省略する。

“私は文系だから ~ がわからない”という表現は、文科、いわゆる文学や人文科学である政治、経済、歴史等々に携わる人に対して失礼にあたるので少しまずいと思う。例えば、現代思想を生業とする人で、コンピュータや分子生物学、量子力学について何も考えていない人は話にもならないし、心理学や社会学で統計解析的手法を用いるのは基本である。ここは「文系だから」という逃げを打たないで踏んばって欲しい。

レバーは足で押すのです

次の編集後記はすごい。かなりの長文なのではしょると、執筆者（女性）は、それまでトイレのレバーは手で押すものと思っていて、これまで一度も足でレバーを踏んで水を流したことがなかった。ある日、病院のお手洗いで偶然足で流す人を目撃してぼう然とする。その後、

[6] センターのある新婚さん (1994 年現在) の名言に「世の中には言っていいことと、言ってもしようのないことがあるのよ」というのがある。

女性の会う人ごとに「手洗いのレバーは手で押すか足で踏むか」を聞いたところ、そろいもそろって“足派”だった。それでまたまたショックを受ける。そのショックの受け方がすごい。

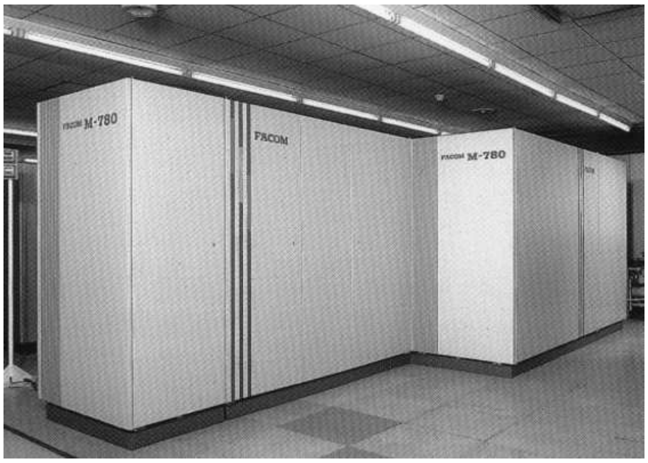
> これが男性のすることならば私は、こんなにも驚かなかったと思う。男性とは背の高さも違えば、見える風景も違うから、おのずと思考および行動パターンも違ってくるものだと納得できる。しかし、同性とは“女どうし”という論理的には説明し難い連帯感に支えられ、ここだけの話よと、他人の噂話をしたり、お互いに恋の悩みを告白しあったりして、心を許し合ってきた仲なのだ。私は、何だか皆で示し合わせて、裏切られたような気がした。自分は女じゃないのではないかと悩みもした。大げさに言えば、人生観が、がらっと変わってしまったようだった。
>
> (署名なし)
> *Vol.22, No.2, 1989.*

なんとも凄いショックだったようだが、このあと「私だって無意識のうちに、他人に迷惑をかけているに違いない」と気がつき「これからは安心して他人に迷惑をかけながら生きていけると思うとすっかり嬉しくなった」そうである。このあたりの心境の変化も感心する。

“女どうし”という話がでたので、さる人 (女性) から教えてもらった、ためになる話を...

問「男が恋すると、どうなります？」
答「明るくなります」
問「じゃあ、女が恋すると、どうなります？」
答「友達を裏切るようになります」

この話をした女性の大半が「そうそう」とうなずくのが印象的だった。かなりの核心を突いた意見である。



FACOM M780

遠い惑星へ来たひと

次は当時十代が編集後記を書いた珍しい文章。

> 人生で、決して接点がないであろうと思われたコンピューター分野に、今年の春から突入してしまった私。
> 4 月はセンター内の人々がかわす会話がまったく分からず、まるで遠い惑星へ来てしまったようでした。現在は、（難しい漢字が含まれた文章のひらがなだけが読めるように）と

ころどころ「あー、あの事かな？」なんて分かるようになりました。（これだけでも、自分では"すごい"と思ってます。）

センター1年生であるとともに社会人1年生でもある私は、今年の夏選挙権を得て投票ができるようになります。弱輩ものですが、どうか九大大型計算機センターともどもよろしくお願いします。

(NAO)
Vol.22, No.4, 1989.

センター内の楽屋を少しのぞいてみると、特に前年の1988年と1989年は、大量の人事移動があった年としてセンターの歴史に記憶されるはずである。教官、技官、事務官ともかなりの入れ代えがあり、あっさりまとめてしまえば、平均年齢が相当若くなった。当時を知る人の証言では、ある掛などは二十歳前後で口は達者な者ばかりが「ピーチクパーチク」集う状態であり、掛長はさながら幼稚園の先生みたいだったそうである。現在はセンターになくてはならない存在に育ち、今後他のどこに異動になっても立派に通用するように育った姿を見るにつけ、ただただ掛長の手腕に敬服するのみである。

不安な今日この頃

広報の編集グループも人がかなり入れ替わる。

今年もあと一カ月余。つい先日平成が始まったと思ったらもう元年もあとわずかです。今年もいろいろありました。昭和天皇の崩御、幼女誘拐殺人事件、消費税、リクルート疑惑、参議院与野党逆転、パチンコ疑惑、近鉄また日本一ならず、などなど。計算機関係では、スーパー301条ですったもんだし、最近では1円落札が問題になっています。センターのスーパーコンピュータも1円で落札してもらうとずいぶん助かるんでしょうが…。

広報発行の仕事をしている4人のうち、2人がまもなくセンターを退職します。お疲れさまでした。残る2人はセンター勤務1年未満、来年の1号は無事にでるのか不安な今日この頃です。

(T.F.)
Vol.22, No.6, 1989.

明けて1990年の1号は、二人の奮闘によってめでたく発行された。が、編集後記には当然ながら、その苦労話が載っている。

1980年代も、あれよという間に過ぎてしまい、去年の出来事を回想する暇もなく新しい仕事が飛び込んでいます。

さて、今回広報を発行するのに大変な苦労（？）をしました。
WHY？ なぜ？ **** 前回の編集後記を読まれた方は、もうお気付きでしょう。広報委員4人のうち2人が、12月をもって退職されてしまったからです。ですから4人で分担していた仕事が、センター就任1年未満の2人の肩に、やけに重くのしかかっているわけです。

原稿を催促するのも、こちらは書いてもらっているのですから、ただ強く言うわけにもいきません。なんとかかんとか、不快感を与えないように、なおかつ確実にもらえるようにしなければならないのです。が、しかし、今回（良く言うと、次回のより充実した原稿内容の為に、又悪く言うと、私の催促があまかった為に）ネットワーク室だよりと、運用企画室だより（もう一つおまけに相談室だよりまでも）が休載ということになりました。すみません。次回にご期待ください。（と言って、各室員にプレッシャーをかけておく）

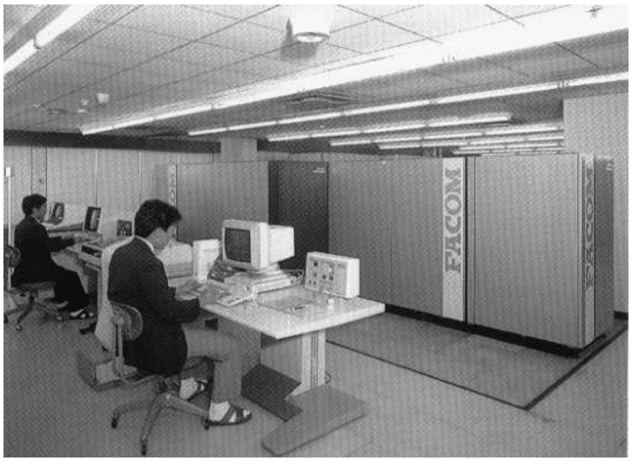
というわけで、新年早々つまづいてはおりますが、私達今年も頑張りますので、センター、広報ともどもよろしくお願いいたします。

〔一瞬、自分が売れっ子マンガ家担当の編集者かと錯覚してしまったNAO〕
Vol.23, No.1, 1990.

1990 年代はどうなるんでしょう

二人になった広報教育室員のもう一人は、相棒の苦労をよそに 1990 年代に思いを馳せていた。

> 1990 年代はいったいどうなるのか、こんなに複雑な世の中、何が起こっても不思議ではありません。コンピュータに限っても予測は難しいようです。数年前にワークステーションの普及とコンピュータネットワークの整備をどれくらいの人が考えていたでしょうか。講義では、"情報システムは中央に大型計算機があり、... "でした。大型計算機センターは今後どうなるんでしょう。技術の進歩と何に利用するかをにらみつつ考えていかなければならないと思う今日この頃です。そのためにも、センターをどう使っているか、どんな成果がでたかなど、広報への投稿をお待ちしています。本年もよろしくお願いします。
>
> (T.F)
> *Vol.23, No.1, 1990.*



FACOM VP200

新戦力の加入

二人で頑張って広報 *Vol.23, No.1* を発行したあと、新戦力が続々加入して編集後記は賑やかになる。

> 世界政治の流れが大きく揺れ動く 1990 年、私にもちょっとした波が訪れて今年から広報の編集に携わることになりました。センター在職歴は十余年というのに全くの計算機オンチ、こういう事になるのなら、もっと早くからもっと真剣に、もっと、もっと... と後悔しきり、悲しいかな、神ならぬ身の知る由もなく！ 今にみていろ私だって...と息巻いてみても堅く、堅くなった脳ミソに弾力はなかなかもどらず。なんていってられません。亀のように一歩ずつ（いくら亀でもあなたほどにはノロマではありませぬぞ！と叱られそう）、末永くお付き合いよろしくお願いします。
>
> (S.A)
> *Vol.23, No.2, 1990.*

次はこの人。

> はやいもので、広報教育室の一員となってもう 2 カ月がたってしまいました。やっとまわりの人たちも自分と同じ普通（？）の人間であることに気付いて、最近は随分と気も楽になりました。コンピュータ関係の雑誌なんてわけのわからない記号や文字ばっかりで、

執筆者の顔が見てみたいと思っていた私にとって、これ幸いこの職場にきて望みが達せられたというものです。最近では電車に乗っても「このおにいちゃん、軽そーな顔してるけど、いやーきっと会社でバリバリに働いているのに違いないワ。」なんて考えたりするのは、全く天然 B 型の私だけでしょうか。

では、今後ともよろしくお願い致します。

(M 子)
Vol.23, No.2, 1990.

「軽そーな顔してるけど、会社でバリバリに働いている」というのはセンターの職場を見てから思うようになったようである。

別に下の人のことを思って書いた訳ではない (？)。

4 月からセンターに勤めています。福岡ははじめてなのでまだよくわからず休日毎に方々をうろついています。というわけで広報する側よりはされる側のほうが似合うのになぜか広報教育室に入ってしまいました。（私信：今回は戦力になれませんでしたが、次回からは頑張るのでなにとぞご容赦を）

福岡の掟や大学の慣習を勉強中でまだわからないことだらけですが（でも宮地岳線の定期を洗濯してはいけないことはわかりました。とほほ...）今後ともどうかよろしく。

(SCH)
Vol.23, No.3, 1990.

なんとなく複雑な心境

ここまでで、広報担当に女性が二人入ったことがわかる。実はもう二人入ってくる。その一人の挨拶。

4 月より、広報教育室の一員として若い室員に活力を与えるために頑張っています。今年でセンター在職 6 年目を迎え、新しい仕事に取り組むことは、億劫でもあり、面白そうでもあり、なんとなく複雑な心境です。（若さが足りないのかな？）

ゴールデンウィークの初日に当たる今日 4 月 28 日（土）、センターは週休の為、数えるほどの優秀なスタッフしか出勤していません。（本当かな）その静かさの中で、薫風に励まされ、時折青空を眺めながら、豊かな気分でこの編集後記を書いています。昨日の帰り道、若葉の柔らかく懐かしい色を眺めながら、いろいろと頭の中で文章を練り、これで明日は素晴らしい迷文が書けるぞと張り切っていたのに、今朝、弁当をテキパキ（？）と 5 個も作らなければならなかったために、頭の中はオカズ・オカズ・・・・・と成ってしまって、つい昨日の迷文も弁当の中に詰め込んでしまいました。でもこの爽やかな風いいですね。広報教育室で頑張れそう。

(筋金入りのオバタリアン)
Vol.23, No.3, 1990.

女性、女性、女性

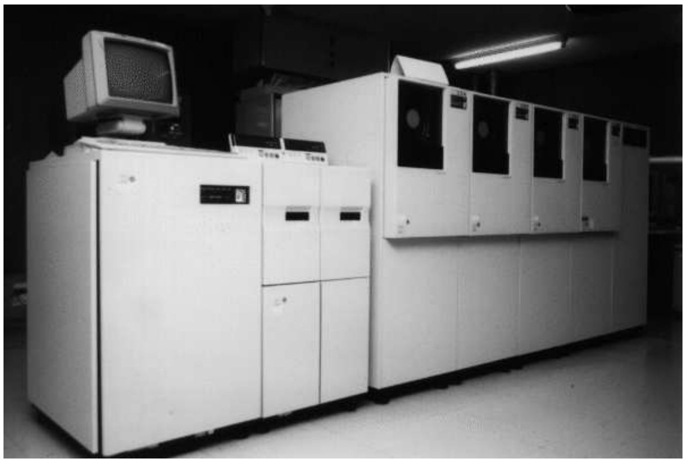
九州大学大型計算機センターは、男女雇用機会均等法ができるはるか昔から女性が多い職場だった。最新のシステムに即座に対応しなければならず、ルーチンワークが通用しない特殊な環境のため、特にセンター設立当時は『10 年のあゆみ』を読むと、男女、常勤・非常勤の区別なしに同程度の責任と仕事を与えられて大いに頑張る様子が分かる。

ともあれ、 1990 年の広報教育室は女だらけになる。以下はそれを象徴する一文。

さて、11 月 3 日は文化の日、あちこちでいろんな催し物があったと思いますが、我がK 町でも文化祭、お手伝いをする立場にある私も 1 日を費やしましたが、本当に今"女性の時代"をつくづく実感しました。文化の花開く秋、何も女性だけのものではない筈ですが、わが町では展示されている作品も大部分女性、舞台の方もほとんど女性、動かしているのも動いているのも女性、女性、ホントにすご — いの一言。

(圧倒されてばかりのか弱きもと乙女 S.A)
Vol.23, No.6, 1990.

S.A さん自身が「すご — い」女性の先頭ではないかという、しごくもっともな疑問は脇に置いて、最近、天神などを夜飲み歩いている男達が減ったことに気がついた。人に「ここはおすすめ」と言われて行ってみた店や、なかなか雰囲気が良さそうな店をのぞくと、大半は女性であり、男は女のパートナーとして鎮座している場合が多い。男同志は何処へ飲みに行っているのか、少し main street から離れたうらぶれた焼き鳥屋にでも入り、表通りには顔を出さないのか。いきなり中洲のネオン街で騒いでいるのか。私はスナックはあまり好きでないので[7]あまり行かないが、一体何処へ行ってしまったのだろう。



現在の磁気ディスク装置

内容のあるラフな記事

今日の服装はスーツ、それともラフな格好ですか？

変な質問をしたのには理由があるんです。通勤電車の中でいつも見かけるスーツの似合う男性（友人 N 子の完全理想のタイプしかし既婚）が、今日は T シャツに G パンといった、ラフな格好だったんです。一瞬勤めている会社が倒産したのではと、いらぬ心配をしましたが、スーツばかりの中で G パン姿というのはとても新鮮でした。（もちろん、清潔さは大事ですけど。）

ですから、九大広報の中にも、内容のあるラフな記事があっても良いのではと思いました。

さあ、明日はどんな服装か楽しみです。

(毎日こんなことで喜んでいる T 子)
Vol.24, No.4, 1991.

「毎日こんなことで喜んでいる T 子」さんは、かなりわがままな注文をつけている。読みやすく、内容のある記事を書くのは、かなり、けっこう、大変である。解説記事ならば、機能

[7]理由は *Vol.27, No.2*『ライブラリ室だより』の A さんの意見と同じで、その場にいる知り合いでもなんでもない赤の他人の"聞くに耐えないへったくそ"な歌を笑顔で聴ける程の余裕は持ち合わせてないから

を羅列してあとは例題を連発すればいいのであろうが、どうしても“無味乾燥”のきらいがある。市販の解説本などが読み易くためになるのは、俗な言い方をすれば“もうけよう”という強いドライブが働くせいだが、一方の広報の記事は全くの無報酬で、果たして誰が読んでくれているのだろうと思うくらい反応がほとんどなく、書いていてものすごく虚しくなる。内容のあるラフな記事が掲載されるかどうかは、今後の課題である。

片手にワンカップ持ちーの、つまみ食べーの

センターでは毎年「慰安」と「親睦」という建前で一泊の旅行をしている。今年の予定は未定だが、センター長、事務長はもちろん、教官、事務官、技官や非常勤の人まで、大体はバスに揺られて“のこのこ”と観光に繰り出している。

ここで慰安旅行のエピソードを書いてもしようがないが、大体の雰囲気は M 子さんの編集後記から伝わってくる。

> 先日、センターの慰安旅行で平戸に行ったのですが、初めて「空飛ぶかぶと虫」ことビートルに乗りました。ゆったりくつろげるリクライニングシートにバーラウンジや、ピカソの絵もあり、BGM の選曲にも気が遣われた快適な 1 時間 20 分でした。・・・と言いたいところですが、我が団体がそう易々と、おとなしく快適な旅なるものをするはずがありません。片手にワンカップ持ちーの、つまみ食べーの・・で、博多港に着いたあかつきには、すっかり疲れきっていたのは某 F 君だけでしょうか・・・？皆さんも、まだの方は是非一度ビートルに乗ってみて下さい。きっと、ジェット機並みの乗り心地に酔いしれることでしょう。
>
> 追伸：松浦史料博物館のお茶室で頂いたカスドースおいしかったね！ Y ちゃん
>
> (ビートルのまわし者 M 子)
> *Vol.24, No.6, 1991.*

残念ながらビートルは 1994 年の 3 月で運休になっている。

センターへの提言

Vol.25, No.1 では、職場から去って行く人がセンターへの提言を行なっている。

> （前略）センターのこれまでの運用形態は、基本的に過去のサービスをほとんど完全に維持しつつ、その上に新しくサービスを追加するという形で行われてきました。しかしながら、相次ぐ定員の削減と人事異動に伴う新人が多い中、もはや「従来どおりの方法で」運用を続けて行くことはかなり難しくなってきています。すでに現在の運用においてさえ、目に見えないところで少数のセンター職員に昼夜を問わず過度な労働が強いられています。こうしたきびしい状況の中、ユーザに対する従来の計算機サービスを実質的に低下させることなく、しかも新しいサービスを絶えず取り入れていくためには、これまで以上に事務官・技官・教官の協力と、古い運用プログラムや運用体制の見直し、使用頻度の低い古いライブラリの廃止、そしてまた、センターが学部や研究所と違って基本的に学術研究よりも運用中心の機関であることを認識すること、できるだけ仕事が特定の人に集中しないよう仕事の負荷分散をはかること、などが必要だと思います。今後のセンターのますますの発展をお祈りいたします。
>
> (M.T.)
> *Vol.25, No.1, 1992.*

「仕事が特定の人に集中しないよう仕事の負荷分散をはかる」というのは全く正しい意見だが、一方で「少数の極めて優秀なスタッフが過度の負荷をものともせず仕事をこなす」からこそ組織は成立するのではないかと思うこともある。落しどころは難しい。

台風といえば台風みたいなもの

1992 年には計算機システムの入れ換えが行なわれた。

> 毎年 3 月 3 日に桜の開花予想がでるのだそうです（福岡だけ？）。でも今年は昨年の台風のために予想が非常に難しく、予報官泣かせだと聞きました。えっ、なんで桜の開花予想に去年の台風の影響が？と思っていたら、台風による塩害のためで、ソメイヨシノは環境に左右されやすく、昨年末の異常開花などもそのせいだとか、紅葉もあまりきれいではなかったし、思いもつかないいろんな所に影響するんですね。
>
> スーパーコンピュータの機種が更新され、3 月 4 日から VP2600 によるサービスを開始します。汎用機も 1 月に更新されており、昨年の OS のバージョンアップ / 更新（9 月の MSP/EX、12 月の UXP）、ワークステーションを用いたパッケージのサービスも含めてこの 1 年間で大幅にセンターの環境が変わりました。現在の環境と今後の計画については今号の記事を参照して下さい。台風といえば台風みたいなものだったのですが、これはすべて最新で最高性能 / 最高機能の計算機環境を整えるためのものです。しかし、速くなった、使いやすくなったというプラスの面以外にもいろいろと影響がでるかもしれません。センターでも注意をはらっているつもりですが、お気づきの点がありましたら、ご一報下さい。
>
> 影響はあってもきれいに咲いているのを見たいものです。

(F)
Vol.25, No.2, 1992.

Fujitsu M1800/20

月日はどんどん過ぎて行く

1992 年になると、センター創立の時点で生まれてなかった人が自分の「年」を感じる記事を書くようになる。

> (前略) 私は、九大に勤め始めてから毎年、この（予備校の）宣伝マン達に受験生と間違われ「がんばってくださぁーい」と言われつづけたのですが、三度目の正直といいましょうか。今回はそのお声がかからなかった訳です。ちょっと寂しいな、というところが本音。でも、同級生も今年で大学卒業だし、だいたい門の所で職場の（約 20 ばかり年上の）人といたから職員だってバレたんだ、などと涙ぐましいこじつけをしてしまいます。
>
> 自分の気づかぬ間に月日はどんどん過ぎて行くもんですね。どうせ年を重ねるなら、素敵にかっこよく生きたいな、なんて思いながら春を待っている私です。

(T 子)
Vol.25, No.2, 1992.

学内 **LAN** 建設

1993 年に入り、九州大学学内 LAN の建設が始まった。ネットワーク時代の本格的な幕開けである。

> さてさて、九州大学では学内 LAN の建設がようやく始まろうとしています。センターでも、MSP を LAN 経由で利用できるようになり、ジョブの遠隔投入もできるようになりました（本号の記事参照）。季節（センターの役割）の変化を表すネットワークの春一番、二番、三番、...が春の訪れを告げるものなのか、荒れる季節の到来を告げるものなのか。ぬるま湯につかっている身にはちょっとした風も身にしみることでしょう。
>
> 「はるはあけぼの」とはいうものの「春眠暁を覚えず」。（春じゃなくても夜明けなんか見たことないだろうって？ そのとおり。）
>
> (T.F)
> *Vol.26, No.2, 1993.*

ドン君

1993 年の編集後記では「M 子」さんの悲しい編集後記が目につく。伏線として 1990 年の M 子さんの編集後記から

> さて、突然ですが、わが家には 4 才になるたいそう毛深い弟がいます。彼の名はドンと申しまして大変喧嘩に強い柴犬です。（中略）顔よし！ 器量よし！ 頼り甲斐 ◎！の（親馬鹿ですみません）そんなドンちゃんのファンになった・あ・な・た・・・お便り待ってます。
>
> (M 子)
> *Vol.23, No.5, 1990.*

その 3 年後、M 子さんはハンサムでひょうきんで頼り甲斐 ◎！のドン君を涙ながらに見送ることになる。

> （前略）しかし、5 年目のある日急に病気であることが発覚し、闘病生活 2 年と 4 カ月、ついに彼はひとり静かに逝ってしまいました。愛する家族にたくさんの思い出を残して。
>
> この世の中で一番尊いものを口の利けない無欲の小動物と 7 年 10 カ月心を通わせてきて、改めて教えられたような気がいたします。（中略）
>
> 目を閉じると彼の思い出でいっぱいです。今にもおっぽを振って走って来そうです。ドン君、ほんとありがとね。
>
> (M 子)
> *Vol.26, No.2, 1993.*

ついでに M 子さんも、この編集後記を最後にセンターを去っていく。参考までに、涙ながらに見送る人はいなかった ... と、訂正します。いました。

もう一つ、1993 年といえばこれである。

> （前略）さてさて、ほとんど解説記事ばかりだった広報に、随想というものが載りました。お堅いマニュアルチックな記事だけでなく、こんな（といっては失礼か）記事も大いに参考になるかと思います。（以下略）
>
> (T.F)
> *Vol.26, No.5, 1993.*

確かに「こんな」とは失礼で、素晴らしい随想が *Vol.26, No.5* に掲載された。

物にもつかず鳴く雲雀

1994年、センターは開設25周年を迎えた。10周年の時がそうであったように、25周年の時にもそれをネタにしたセンターの変遷を語る記事がT.Fさん記で編集後記に載った。

そしてこの編集後記は、10周年の時に *Vol.12, No.1* でY.Sさんが投げかけた

「創立20周年を迎えるころはどうなっているでしょうか」

という問いに対する、5年遅れの回答である。

> 暖冬から一転寒さの続いた冬もようやく春を迎えようとしています。九州大学の学内LANであるKITEも一期工事を終え、二期工事も今年度中には終了し完成する予定です。各大学でも学内LANの整備が進み、地域ネットワーク活動、幹線の整備によって、本格的なネットワーク時代の到来となりました。
>
> 九州大学大型計算機センターは今年で開設25周年を迎えます。25年前といえば、日本は高度成長時代のまっただ中、今や高級住宅地(?)となってしまった自宅の回りは田圃だらけで、この季節には空を見上げて揚雲雀を追っていたものです。そういえばいつの間にか雲雀の声を聞かなくなってしまったなぁ。
>
> 10年前には常識だった集中型コンピュータシステムをネットワークで結ぶ形態は、パソコン、ワークステーションの普及とネットワークの整備で、分散環境へと変化しています。大型計算機センターの設立から四半世紀、今センターの役割そのものが改めて問い直されているのではないでしょうか。スーパーコンピュータ、ネットワーク、データベースをなんとなく納得させられてしまうキーワードはありますが、今一度原点に戻ってセンターは何を求められているのかを考えて見る必要もありそうです。
>
> 原中や物にもつかず鳴く雲雀 (松尾芭蕉)
>
> 晴れたら雲雀を探しに歩いてみよう。まだ早いかな。
>
> (T.F)
> *Vol.27, No.2, 1994.*

まだ雲雀が見つかったという話は聞いていない。

Fujitsu VP2600/10

写真提供： 九州大学出版会
九州大学大型計算機センター
illustration： Hidaki Naoko

8

参考文献

[1] 「10 年のあゆみ」九州大学大型計算機センター広報・特別号, 1981.

[2] 「米軍機墜落炎上 — 昭和 43 年 6 月 2 日 九州大学大型計算機センターに —
(改定 第三版)」芦刈 克巳, 石崎印刷, 1987.

[3] 「20 年史資料」九州大学大型計算機センター, 1989.

[4] 「写真集 九州大学史 1911 ~ 1986」 九州大学出版会, 1986.

[5] 「利用の手引・ライブラリ編（第 2 版）九州大学大型計算機センター, 1994.

あとがき

この原稿では、 1968 年から 1994 年までの九州大学大型計算機センター広報の編集後記を追いかけてきました。読んでおわかりのように、色々な人がいろいろな視点からいろいろな意味を込めていろいろな文章を綴っていました。

さて、編集を終えての私の感想は、「編集後記などの短いエッセイには、女性の方が向いている」です。

編集後記は"堅い"解説記事を経てきた読者に対する息抜きの場です。長い文章や理屈っぽい文章を書かれても、あまり読む気がしません。

男性の書く編集後記は、一般論を展開し、なにごとかの結論を出したがるものが多く見受けられました。それはそれで結構なのですが、息抜きの文章としては解説記事の延長のようでちょっと堅すぎます。一方女性の文章は、自分が見たこと・感じたことを語り、結論をあまり求めたりしません。また、自分の感覚を凝縮して短い文章に込める技術は、男性より女性の方が長けているように思えます。これは、女性の方が男性より手紙を書くことが多いからかもしれませんし、もっと深い理由があるのかもしれません。

センターの歴史については、文章の間からぼんやりと「ふうん、昔はこんな風だったのか」と感じていただければ充分です。私はセンターの計算機システムの変遷には最初から全然興味がなくて、むしろ写真でもおわかりのように、妙にでかい「ずうたい」をした計算機システムを前に、当時のセンターにいた人たちが何を考えていたかに興味がありました。

もちろん、編集後記のおもしろい文章を紹介したかったのも執筆の理由の一つです。

今後、編集後記にますます楽しい文が載ることを期待するとともに、センターが 50 周年を迎えるとき、どなたかこの続きをまとめて下さることを願っております。

1994.7.8